

第19回全国バス学習研究集会

分科会提案資料

期日 1984年10月26日(金)27日(土)

場所 広島県豊田郡豊町・豊浜町
(幼・小・中・高)

地域の教育課題をふまえた教育内容の創造へ向けて

兵庫県姫路市立城陽小学校 沢田映子

1. はじめに

本校では全児童数の3分の1を対象地域児童がしめ、地域改善のための推進教員も4名配置されている。本校の教育は、子どもたちひとり一人に「正しく力強く生きる力」をつけることを重視している。

対象地域の生活環境は、同対法及び地対法に基づき事業でかなり大きく改善された。しかし子どもたちの家庭状況はまだまだ困難な実態がある。子どもたちの親の多くは、不安定な厳しい労働で生活を支えている。そこで本校では、子どもひとり一人の生活・学力両面を多方面から見直し確かな学力をつけるとともに差別のない学級経営の推進に力をそそぐべく下記のテーマのもとにとりくみをすすめている。

2. 学校テーマ

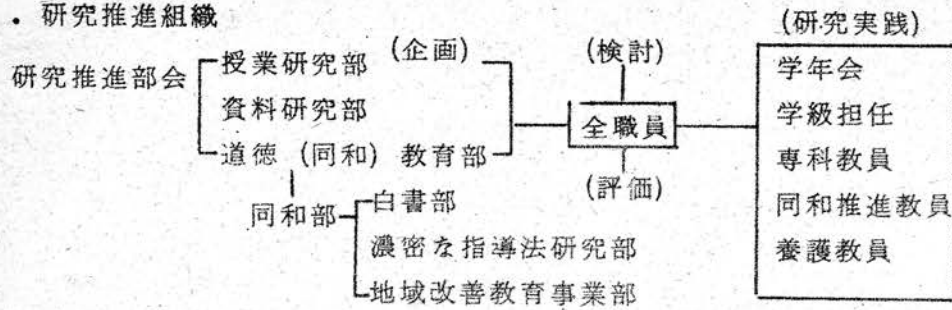
対象地域を含む学校における道徳(同和)教育のあり方を求めて
——自他の人権を確立し、差別解消につとめる連帯を育成する——

3. 道徳(同和)教育を進める重点

小学校における全教育活動を通して行う。

- (1) 地域・児童の実態を的確に把握し、それを基盤として進める。
(意識調査 行動調査 生活背景等)
- (2) 人間尊重の精神の生活化をはかる。
(豊かな心情 正しい価値観 人権感覚)
 - ・教師と児童、児童相互の人間関係を深める。
(子どもの生活や想いをつなぐ配慮)
 - ・自己解放がなされているかを個々に観察するとともに自己表現力を高める。
(本音が出せる場づくり 人づくり)
- (3) 基本的生活習慣の定着をはかる。
(家庭・地域との連携 生活指導の徹底)
- (4) 部落差別を正しく理解し、差別を解消する力をつける。
(地域の課題を探り、自分の役割を考える)
- (5) ねばり強く生きるための体力作り。

4. 研究推進組織



5. 各部活動の重点

	活動内容	実践計画
道徳 (同和) 教育部	<ul style="list-style-type: none"> 全体計画 指導の方針と年間計画の作成 授業研究計画と実践 地域の課題の教材化 (差別を克服して生きる人々の姿) 	<ul style="list-style-type: none"> 学年の指導計画の検討 「ねらい」について 道徳 (同和) 学習の実践化 生活指導との連携 研究授業の計画 「友だち」文学作品の活用 部落問題認識への系統的指導のあり方
白書活動部	<ul style="list-style-type: none"> 対象地域を含む学校における児童の実態と指導の方向をさぐる。 家庭地域への啓もう 	<ul style="list-style-type: none"> 基本的な生活習慣の育成 (学ぶ意欲づくりのために) 問題の発見と手だて 日記指導 学級新聞 観察視点の明確化
濃密指導部	<ul style="list-style-type: none"> 学力保障確立のための体勢づくり 個人指導の工夫 推進教員相互及び担任との連携 	<ul style="list-style-type: none"> 算数科での複数指導 個人カルテの作成 5分間テストの位置づけ SP表の活用 対象児へのかかわり ふれあいの場づくり
地域改善教育部	<ul style="list-style-type: none"> 部落差別解消のために意欲的に活動できる人間性豊かな青少年の育成のための事業内容の創造と検討。 7事業 (420時間) 町運営委員との連携 	<ul style="list-style-type: none"> 基本的な生活習慣の確立と自主的学習方法の習得 人権学習を通して部落差別解消の力をつける 奉仕活動 (町内美化) 地域センター図書の利用 (高学年児童の自主運営)

6. 地域ぐるみのとりくみ

<p>○ 育友会同和教育部</p> <p>子どもを中核にすえて同和教育を考え、家庭や地域とのかかわり方を探る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 部内研修 姫路市同和教育中央講座に参加研修会をもつ 人権の歴史学習を行う ・ 両親学級の企画推進 	<p>○ 校区同和</p> <p>校区同和教育推進委員が中心になって地域同和のあり方について研修し、これを広める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 推進委員会 ・ リーダー研修会 ・ 町別学習会 ・ 交流学習会
---	--

7. 実践例 (城陽小学校中学年でのとりのくみ)

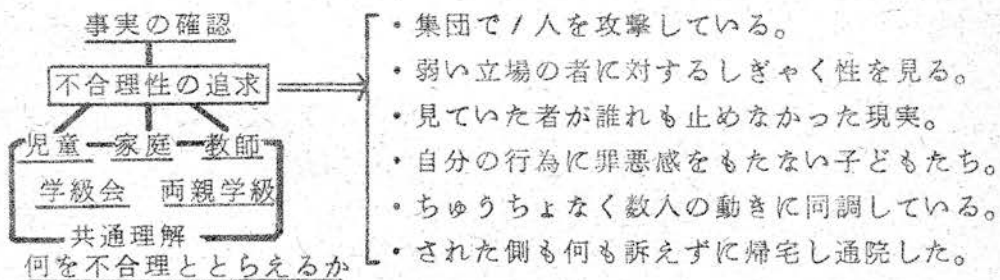
ねらい

不合理な生活事象に気づかせ、解決にむけて行動する子を育てる

実践への手だて

1. 生活の具体的事象をとらえて不合理を解明し、解決への正しいすじ道について考えさせる。
2. 道徳(同和)学習での文学資料を通じて差別の苦しみやそれをはねのける力や行動を心情的に受けとめさせる。
3. 父母の仕事や生き方について学ぶ中で、正しい労働観・価値観を身につけさせ家庭での自分の役割や生き方について考えさせる。
4. 解放学級で学ぶ友だちの姿から地域改善教育事業について理解を深め、自分とのかかわりを探らせる。
5. 郷土学習によって地域の実態を知るとともに地域を育てた多くの人々の苦勞について考え、差別解消にむけて今後の課題を調べる。
6. 家庭での対話を大切にし、自分の考えが話せるようにする。

実践(1) ドッジボール事件から両親学級へ



事象のとらえ方について

日常生活での出来事はともすればありふれたこととして省りみないことが多い。人間尊重とはどういうことなのかを子どもの生活を通して考えさせ、差別や不合理を鋭くとらえることの大切さをそれぞれの立場でとらえることができた。

(1-3)

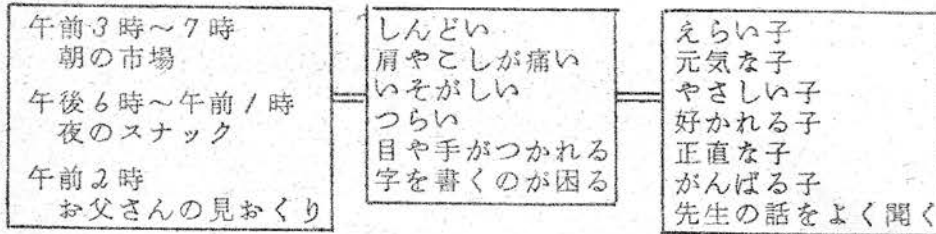
実践(2) 道徳 (同和) 学習 「島の太吉」

文学教材を読み深め、 同和視点に即して焦点 づけた授業 心をゆさぶる授業の創造 物語への同化 生き方への共感	指導計画—3時間— 同和視点
---	-------------------

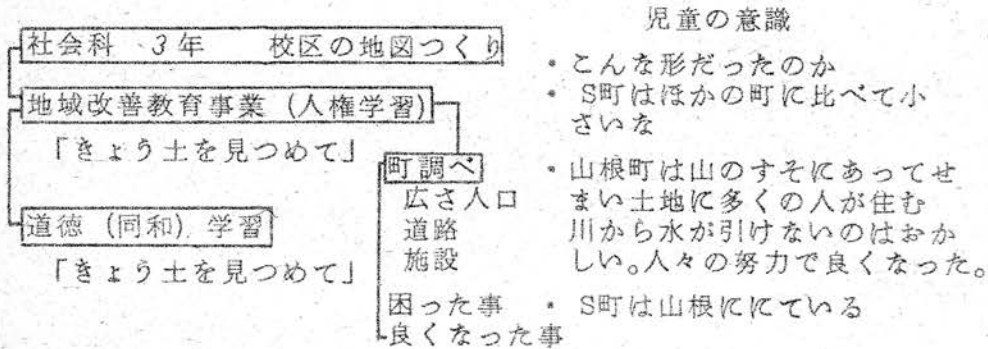
- ・父が島を出た事情と家族の願い (願い)
- ・はなれてくらす家族の苦しみ (差別)
- ・村人の誤解を解いた一家の生き方 (連帯)

実践(3) 地域改善教育事業 (人権学習) 「お母さんのないしょく」

仕事の厳しさと母の願いから自分の生き方を考えさせる。



実践(4) 郷土学習



S町児童の発表を中心に後半の学習をすすめる S町の問題点と人々の努力を知るとともに地域改善教育事業に学ぶ友だちへの理解が深まった。

8. 今後の課題

本校では、3年生から地域改善教育事業 (解放学級) に参加しており、なぜ S町にだけ解放学級が行われるのかそれぞれの立場で疑問をもっている。一連の郷土学習を通して視野も広まり、この問題を解明しようとする気持ちも高まってきている。

日々の生活の中で人間尊重の精神を個々が主体的に身につけ、差別解消にむけて行動力を培うとともに自ら同和問題に気づいて正しく部落差別を理解していこうとする子を育てるために系統的に指導を重ねていきたい。そして、児童の成長とともに親や教師も人間本来の生き方の追求のために課題を探りつづけていきたいと考える。

研究主題

やる気を育てる授業改善
(国語を中心に)
—— 個人学習とノート利用を基にして ——

兵庫県 加西市立 北条小学校 国田徹也

1. はじめに

本校は、5年前より「児童の相互作用をとおして一人一人を生かす学習指導」をテーマに、バズ学習にとりこんできた。

その間、これまで一斉学習の中では意見が出せなかった児童が、バズ学習体制を進めるにつれ、グループ内で意見が出せるようになったり、児童相互で教え合ったり、助け合ったりして、学習に参加することの喜びを体験させることができた。

しかし、自分の考えがまとまらないまま話し合いに入った時は、意見を出せず、受け身的に授業に参加するという問題点も浮かび上がってきた。

2. 研究仮説

(1) 問題点の分析

児童が、自分の意見を短時間にまとめることができにくい理由としては

- ・ 内容について十分な読み深めができていない
 - ・ 短時間に自分の考えを整理し、発表することに自信が持てない
- の二つが考えられる。

以上の問題点を解決するために次のような仮説をたてた。

(2) 仮説

- ・ 文を視写するという作業を行えば、目で読むだけで気づかなかった細かい表現の違いに気づき、言葉にかくされた深い意味も感じられる
- ・ 自分であらかじめ、課題に対する答えを考えておけば、自信をもって授

業に臨める。

(3) 具体的方法 (③～⑧が個人学習)

①音読する

②課題を作る

③本文を視写する

④調べ読み(文章を読んで気づいたことや感じたことを符号で書き込む)をする

⑤その箇所に自分で考えたことや辞書で調べたことを記入する

⑥自分なりに課題に対する答えを出す

⑦グループで話し合う(友達の考え、疑問に思ったところをそのつど書き込み、さらに読みを深める)

⑧全員で討議し、読み深める

3. 授業実践による検証

(5年 伝記文 赤十字の父・アンリー＝デュナン)

(1) プリテストの結果より

①今までにほとんどの児童が何らかの伝記を読んだ経験はもっている。

②野口英世(35人) ヘレンケラー(19人) ナイチンゲール(18人)

エジソン(15人) キュリー夫人(9人) ベートーベン(9人)

ライト兄弟(10人) キリスト(8人)

③その中で特に感動した人は

ヘレンケラー(15人) ナイチンゲール(12人) 野口英世(4人)...

④アンリー＝デュナンについての伝記は少なく、

すでに知っている者(15人) 知らなかった者(25人)である。

(2) 学習のながれ(単元の始めから)

全文を読み、感想を書く (2)

- ・「傷ついた者に敵も味方もあるものですか。人間は、みな兄弟です。」という言葉に感動した。
- ・死ぬかもしれないのに川を下って傷病兵を助けたのは立派だ。
- ・自分のことは考えず、人のために働こうとしたのは、えらい。

A-1-2

- ・どうしてノーベル賞の祝賀会をこわったり、賞金をきふしたりしたのだろう。
- ・自分の命よりも赤十字の方が大切なんだな。

新出漢字・難語句をおぼえる (2)

学習課題を作る (1)

課題にそって深く読みとる (8)

- ・デュナンは、どんな一生を送ったのだろう (年表作り・視写)
- ・デュナンの考えを変えさせたものは何だろう
- ・その後、デュナンは、どんな行動をとっただろう
- ・デュナンは、どのように赤十字を生み出したのだろう
- ・砲声の中をデュナンはなぜ川を下っていったのだろう
- ・晩年のデュナンは、どんな考えの人だったのだろう
- ・一生を通じて、デュナンはどんな人だったのだろう

学習後の感想文を書く (1)

感想文を読み合い、文集にまとめる (1)

(3)授業分析と抽出児童の活動 別紙

(4)児童の変容(児童の日記より)

・私は、このごろ国語の勉強が大へん楽しくなりました。デュナンの話は大へん長い文だと思ったけれど前の日に一人調べをしてノートに不思議なことやいろいろな問題や自分の考えを書きこんでいくと学習中、友達と話し合ってもよくわかるし、自分の意見もすらすら言えるし、わかるまで言い合ったりして、とてもおもしろいです。だから今まで勉強したことで、質問しようと思ったことは全部わかりました。

(M)

・DさんとMさんとSさんが1つの問題について討論した時、すごく自分の意見に自信をもっているのが楽しかったです。討論は、ああいうふうにするんだと思いました。だから私は「今度から勇気を出して言おう」と心に決めました。Mさん、SさんはグループみたいでDさんだけが1人みたいでしたが、Dさんは1人でも負けないぐらい言ったので私もみならおうと思います。自分でしっかりした意見を持つことが大切だと思います。

(K)

・私は1回しか発表しなかったけど、友達の話聞いてよくわかりました。グループで話し合うとき、Oさんが説明してくれたのでよくわかりました。私も今度から、もっと発表をしようと思います。

(T)

(5)赤十字の父・アンリー＝デュナンを学習しての感想

アンリー＝デュナンは赤十字の父とよばれるほど赤十字のためにすべてをささげた人です。

私は、この話を学習してデュナンがいなかったら今日、世界は戦争にあけられていただろう。その戦争もデュナンが見たソルフェリーノの光景よ

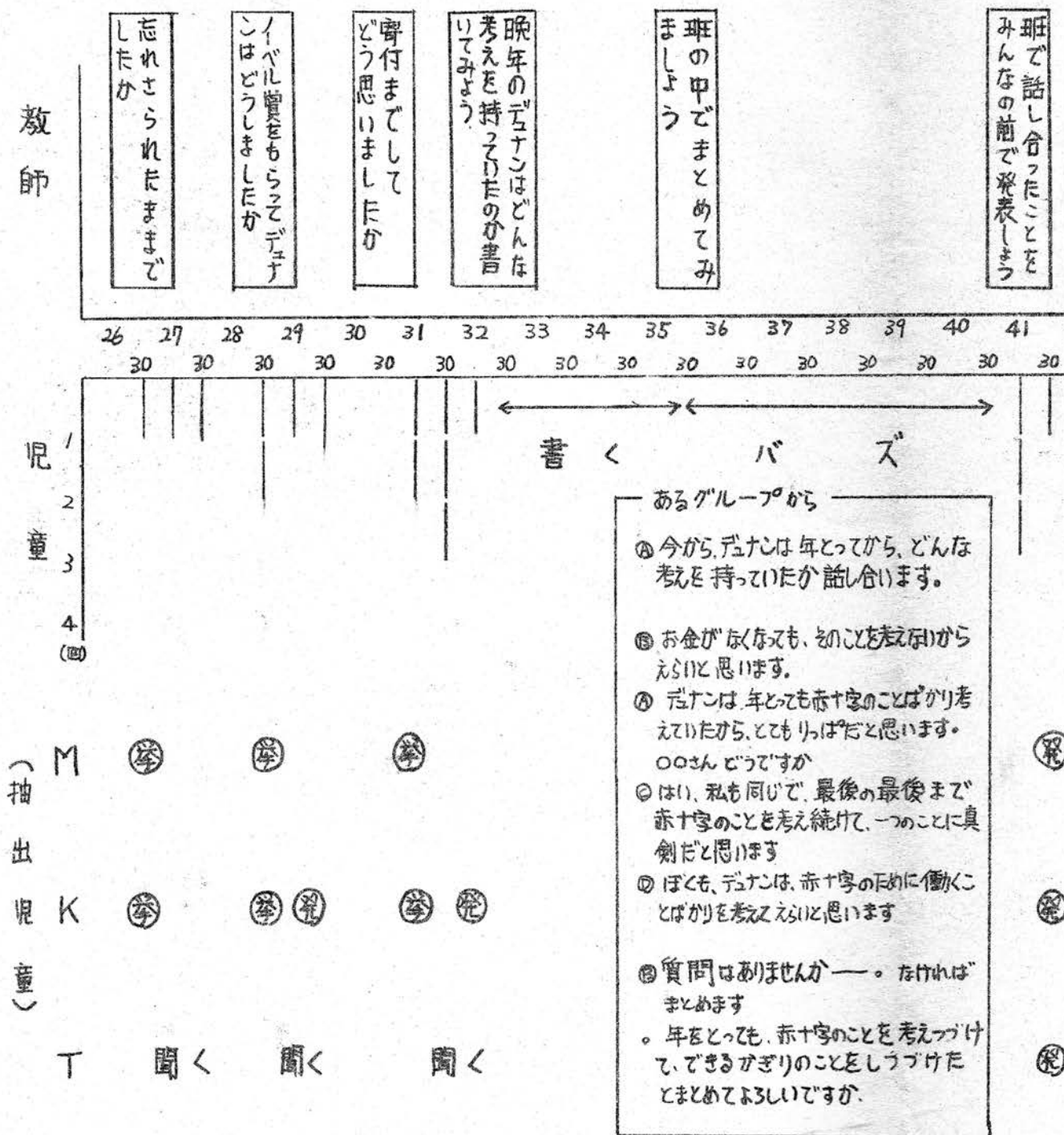
リも、もっともっともごたらしい光景を作っていたと思います。私は
 デュナンという人は、私達未来人（デュナンから見たら）に必要であ
 ると言いつけるだろうと思います。
 現在、赤十字は、平和のためにいろいろ活動してくれています。で
 もそれは、デュナンが望んでいるようなことをしているか、していな
 いか、自分には分からないけれど、デュナンがいたからこそ赤十字は
 平和のために働こうとしてくれているのだと思います。
 デュナンの行動をたどってみると、初めは自分のためだけの、欲ば
 りだったけれど、ソルフェリーノの兵士達の様子を見て、人のために働
 いたことがわかる。それから、ずっと戦争のむごたらしいさ、こわさ、
 ひどさを世界にさけびつづけたのは、もえるような人間愛を持ってい
 るデュナンには、たえられなかったんだと思う。（戦争のむごたらしいさ
 を見すこすのは、----ノ
 自分が貧乏になっ、ても、人々をうらまないと心は、とても美し
 くてりっぱな心だと思ふ。私がデュナンであれば、赤十字のために、
 このようになっ、たんだと赤十字をうらむだろうと思ふ。そんな
 デュナンを人々は忘れてしまうなんて、とてもひどいことだ。その時
 私は、「人々は結局、お金の有る者でなければ知らんぷりするの
 と、はらがたつた。デュナンは、きっと心の百分の一ぐらいは、その
 ことを思っていたらうなと思ふ。本当に人々をうらまないと私
 には考えられないからだ。
 ノーベル平和賞の賞金さえも、きふするなんてデュナンは最後の最
 後までりっぱだったと思ふ。
 「ノーベル平和賞」それは、世界平和のために働いたデュナンの受
 賞した賞であり、今からその賞をもらう人は、博愛心がゆたかで、も
 えるような人間愛をもったデュナンの心を受けついでいると思ふ。
 (S)

4. まとめ・今後の課題

個人学習を重視し、ノートに書き込みをさせることで以前に比べると
 学習中の発言も活発になってきた。児童達は意見を述べることの喜
 びを感じ、積極的に学習にとり組むようになったと思う。これは、自
 分の意見にある程度、自信がもてたということが原因だろう。児童の
 意見にもあったように、ただ単に意見をのべるだけでなく、グルー
 プや全体で意見の対立をし、それについて討論することを望むまでにな
 ってきた。従って、今後、意見が対立するぐらい深い読みとりをさせ
 るためには、課題や発問をよく吟味し、精選する必要がある。

また、意見の言えなかった児童に対しても能力に応じた個別学習を
 させ、グループで支え合って少しでも意欲的に発言したり、学習に参
 加できるようにしむけていきたい。

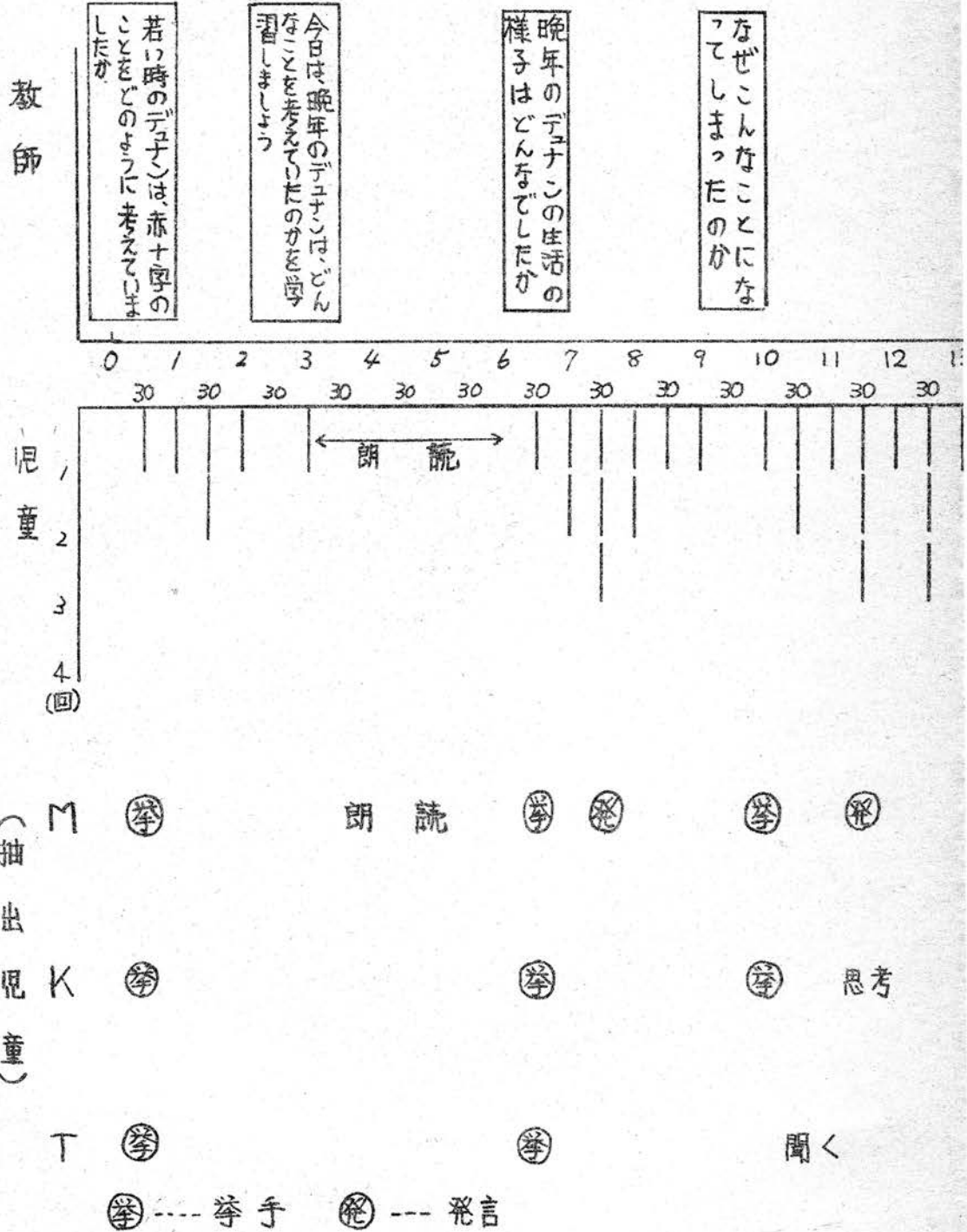
※ 資料 授業分析と抽出児童の活動 No.2



学習のまとめ

42	43	44	45	46	(分)
30	30	30	30		(秒)

※ 資料 授業分析と抽出児童の活動 No.1



すべてを打ち込んだ
とほどういふことでしょうか

デナシをどう思いますか

忘れさられていった
デナシは後悔した
らうか

デナシ自身はどう思
っていたらうか

3 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 (分)
30 30 30 30 30 30 30 30 30 30 30 30 30 (秒)

拳

拳

拳

拳

拳

(死言の意志あり)

拳

聞き入る

拳

拳

メモを取る

聞く

うなづく

首をあげる

思考

この戦争が終わった後も、デナンは、赤十字のことを考え、続けていた。人道と平和のためには、赤十字の事業を、戦時の救護活動だけでなく、さらに広げていく必要がある。デナンの理想は、赤十字が、戦争や病気などの人類の苦しみをなくすために、進んで平和の使徒として活動することであった。かれの考えは、しだいに世界の人々の間に広まっていた。しかし、その後のデナンの生活は、決して幸せなものではなかった。かれは、赤十字の仕事にすべてを打ちこみ、自分の生活のことは考えなかった。そのため、北アフリカでの事業も、失敗し、多くの借金を負う身になってしまったのである。赤十字、国際委員会の委員もやめた。デナンは、イギリス、フランス、ドイツなどの各国を転々としながら、貧しい生活を送らなければならなかった。時には住む部屋がなく、駅の待合室（夜を明かした）こともあった。こうしてデナンの名は、しだいに世

一つのことに熱中して最後までやりとおす人。
わたしたちも、デナンに考えを学べれば、すぐにあきらめてしまったらうは。
世界の人々が平和に無しくくらしてもううのには自分はどうなってもいい。
デナンは少しでし自分の願いが知られたのでどうもうれしかたたらうならい。
事業までして、赤十字のことに熱心になるなんて、よほど博愛心の強い人。
自分のミスで借金を負う身にならなければならぬ。だから、世界の人々のために苦しんでいらないからない。
もう年をとつていらないから、赤十字のことから待合室で夜を明かした、ア、ア、

のすべてを打ちこみのすべてとは、自分のもののみな。
たとえは、ごいさん事業命。
。手とにあるもの全部。
なせ、委員会をやめたのか。
借金を負う身にならないから、委員会の人々にめいわくをかけた人ならないからやめた。
。やうことはやめたらうからないから、後は他の委員会の人々がやつてくれるらうからないからやめた。

六九五五年、スイスの新聞記者が、ハイテンという村で
 活い、その後を試している。テナンをたすねてきた。やが
 てその会見記がヨーロッパ各地の新聞にのった。わすれ
 られていったテナンの名が、再び人の心によみがえった。そ
 して、テナンを助けるための財団が設けられ、かれの生
 活も少し楽になった。

一九〇二年十二月十日、このテナンのもとに、一通の電報が
 とどいた。それは、この年初めて平和への功労者におくら
 れることになったノーベル平和賞を、アンリ・デュナンに
 おくるという知らせであった。アンリ・デュナンの赤十字国際
 委員会では、かれのために受賞のための祝賀会を開き、
 祝賀会では、アンリ・デュナンの代表が、来賓として、祝賀会に
 うつした。しかし、かれは、いかにそのことわった
 として、ノーベル平和賞の賞金のうち、半分を、スイスとノ
 ルウェーの博愛事業に寄付するよう遺言した。
 一九〇年十月三十日、美しい湖にのそんだハイテンで、アンリ

なんでも、いっしょうけんめい
 になる人
 わたしたち、たう、すぐあきた
 ら、やめてしま、うけとな。

生活がらくになつてよかた
 ね。

ノーベル平和賞をもらつて
 よかたね。
 いままで、くろ、つした、か、い
 ありよかたね。

速りよぶかい人
 △会議をたけときとお
 なした。

よくのなない人
 あれだけ、生活に、こま
 ていたのにな。
 わたしたち、たう、さ、いせ
 すちよ金するけとな。

① なせ祝賀会をことわったのか
 分からぬ

② なせ賞金をさしたのか
 ひんぼうになつて、赤十字に
 寄付することができなくなつたので
 お金ができたので、今までの
 分と、りもとすために、や、だ
 と、思、つ

児童のやる気を育てる国語の読解指導

～課題の追求と相互作用の活用を通して～

愛知県春日井市立西山小学校 松原克彦

1. はじめに

本校では昨年度より児童のやる気を育てる学習指導に取り組んできた。しかし、本校では学年が進むにつれて、授業への参加度が低くなる傾向がある。そこで私は、あらゆる学習の基礎となる読む力を児童につけさせ参加度を高めるため、昨年度より国語の読解指導の実践を進めてきた。この記録は、その実践の一端である。

2. 実践のねらい

研究主題のサブテーマである「課題の追求と相互作用の活用」をすることは、まず下記のようなねらいを持っている。

- 課題に対し、児童がそれを理解し、個の考えを持つこと。
- 課題に対する意見を、児童が互いに交流させること。
- 意見の交流により、児童の理解が深化拡充していくこと。

これらのねらいが達成されることにより、さらに次のようなねらいが実現することを期待している。

- 児童の参加度を高める。
- 児童のやる気を喚起し、学習意欲を高める。
- 個の育成をはかる。
- 基礎学力を高める。

3. 国語の読解指導の授業実践に対する仮説

上記のねらいをふまえ、私は国語の読解指導に対し、効果が上がるだろう

という条件を次のように考えた。

(1) 課題について

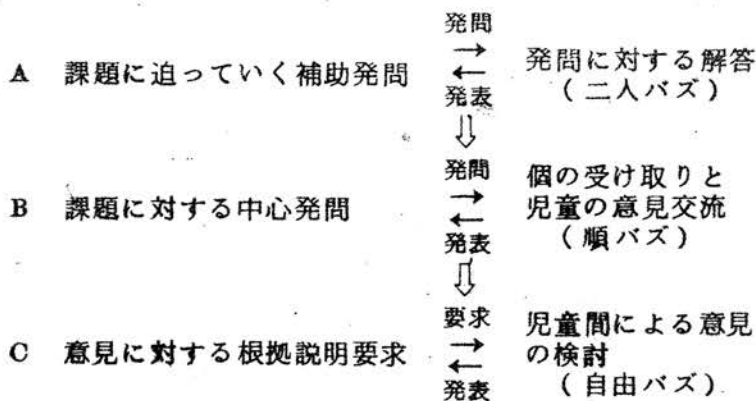
- 児童が複数の意見（解釈）を出せるような課題を、常に教師が設定すること。
- その複数の意見に対し、教師は児童に常に文章に基づいた根拠の説明を求めていくこと。

当然のことであるが、1つの意見にまとまるような単純な課題では、児童の思考は深まらない。理解の深化拡充をはかるためには、複雑で様々な意見が児童より出され、それらをはっきりさせるために、文章に基づいた根拠を探させ考えさせていくことが大切である。根拠が明確な意見は、児童の話し合いの中で残り、深められていくが、それが不明確なものは、話し合いの中で消されていく。筋道の立った意見を整理していける課題により、児童は思考を深めていくのである。

(2) 相互活動について

- 課題にそい、教師の意図した相互作用の方法が、指導過程の中で適切に配置されていること。

課題に対する条件を満たしただけでは、国語の読解指導の効果は望めない。そこには、課題を意識した上での発問と、それに見合った教師の意図的な相互作用の配置が必要である。その上に、指導過程に於いて、次の流れを私は意識している。



原則的には、この図の流れで読解指導を行うことにしている。発表に関し

ては、教師対児童だけでなく、児童対児童も含まれている。この流れの前後に於いて、読みの指導を適宜入れていくことは言うまでもない。Aの段階でバズを入れるのは、確認・徹底のためであり、Bの段階では、意見を多数出させるため、そしてCでは、意見の調整をはかり、理解の深化拡充をさせるためである。またB・Cでは自分の意見をグループの中で発言させることにより、全体の場で発表することへの抵抗をやわらげる意味を持つ。

(3) 授業実践の仮説

以上の条件をふまえることにより、次のような仮説を私はたてた。

「よい課題と、意図的な相互作用の活用により、児童は、文章の中の一つひとつの言葉に心を配り、注意深く文を読み取るようになる。」

4. 国語の授業での実践例

(1) 三太とタヌキのしっぽ（光村、5年上）の実践例

ア. 単元の目標

- 文章を読み、その文から情景を思い浮かべることができる。
- 文章を読み、その登場人物の人物像をまとめることができる。

イ. 指導計画 略（8時間完了）

ウ. 本時の指導 6/6

ウ) 本時の目標

- 三太のとった行動を読み取り、その状況を図示できる。
- 図示したものを、お互いに知り、状況の位置関係を文章を通した根拠により説明することができる。

ウ) 本時の課題と児童の反応

課題は、三太・タヌキ・おとう・山鳥の位置関係を図示するということである。それに迫るために次の補助発問をした。

「三太の位置からタヌキは見えたか。」

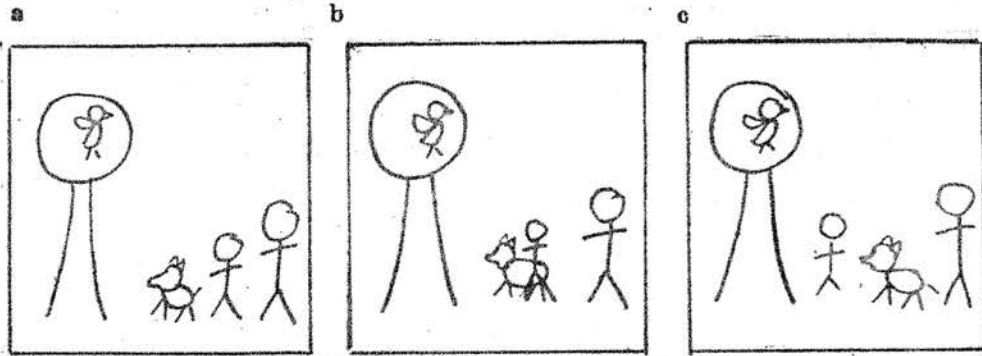
「おとうは何をねらっていたか。」

「山鳥は何を見ていたか。」

以上のことをおさえておいて、課題のために次の中心発問をした。

「三太・タヌキ・おとう・山鳥の位置を図示しなさい。」

児童の反応は大きく分けて三つであった。下記の例示のようである。



この3つの図を検討させたら、aの図がやはり消去された。その理由としては、「タヌキが三太の前には、三太がタヌキに気づいてしまうから。」と、「おとうはタヌキをねらっていたのだから、もしタヌキが三太の前にはいたら、おとうは三太にあぶない、どけっ、と言うはずだ。」などというのが意見の根拠としてあげられた。

次にb、cの図の検討に入ったが、cの図が全体的に多数の支持があった。「三太がとびだしてきたのだから、やはりタヌキは三太の後ろにいたのだ。」と「お前がこっちにこなければというのから、三太はあたった後ろのタヌキのしっぽをとったのだ。」というのが、主な意見の根拠だった。それに対しbの図は少数の支持であった。「山鳥はタヌキを見て木にとまったのだから、三太の後ろにいる必要はない。」というのと、「あまりに近かったのというのから三太のそばにいたのではないか。」という意見であった。それに対し、「おとうが目の前、それも地面目がけてというところから、やはりタヌキは三太の後ろにいたのではないか。」というところで時間切れとなり打ち切った。

エ 授業実践の考察

この課題は、情景を思い浮かべて、というこの単元の目標にそって考えたものである。文章には四者の明確な位置は示されていない。三太の

作文の中心となるタヌキ狩りの様子を、児童にイメージ化させるには、文章から読み取ったものを図示させるのが一番良いのではないかと考えたのである。併せて、次時にこの図を使って三太の動きを図示させていくことにより、その人物像を考えさせる手がかりになればとも考えた。

補助発問は、課題を児童が抵抗なく受け入れられるよう考えたものである。本文を少し注意深く読まないで、考えられないような問題にしてある。この時に確認のため二人バズを使用したところ、児童の挙手も多くなった。

中心発問に対する児童の意見を全体場で発表させる前に、グループで個々の意見を照会させたところ「同じ意見だ」とか、「少し違うぞ」というような声があがっていた。発表の時も、自分の意見を言いたがために、挙手量も多くなった。そして発表された意見にも賛成・反対の反応がよく見られた。

意見への根拠要求も、文章にそって述べねばならないことから、児童が「○ページの○行目からわかるのだけれど」という前置きをしていた。この前置きがなかった時は他の児童から、「それはどこに書いてあるのですか。」という催促が出た。この時児童は自分と対立した意見が出ると、それを論破しようとして、新たな根拠を文から探そうとした。この児童のやりとりが繰り返されて、そういう意見もあるのかと同調する者もいたし、そうではないと別の意見を述べる者もいた。しかし、この根拠の説明の時には、児童の挙手率が5分の1程度に落ちた。

ここでの課題は、位置関係を横から見た図だけであったが、上から見た図もかかせたら、意見のやりとりはどうなっていたのだろうか、後で反省させられた。

(2) またとない天敵・自然を守る(光村、6年上)での実践例

ア 単元の目標

- 文の叙述に即し、要約する力を育てる。
- 文章の内容を理解させ、筆者の意見を知ることにより、自分の考えをはっきりとさせる。

イ 指導計画 略(14時間完了)

ウ 本時の指導

(ア) 本時の目標

- 文章にそって、筆者の力点のおく文をぬき出すことができる。
- 筆者の考える、人間と自然の関係を考えることができる。
- 第3章の要約分を書くことができる。

(イ) 本時の課題と児童の反応

本時の課題は、筆者は人間と自然の好ましい関係をどのように考えているか、ということである。本単元は説明文であるため、筆者の主張が込められている文は、文末表現に注目させれば、比較的容易に児童に把握させやすい。そこで、まず最初に次の補助発問をした。

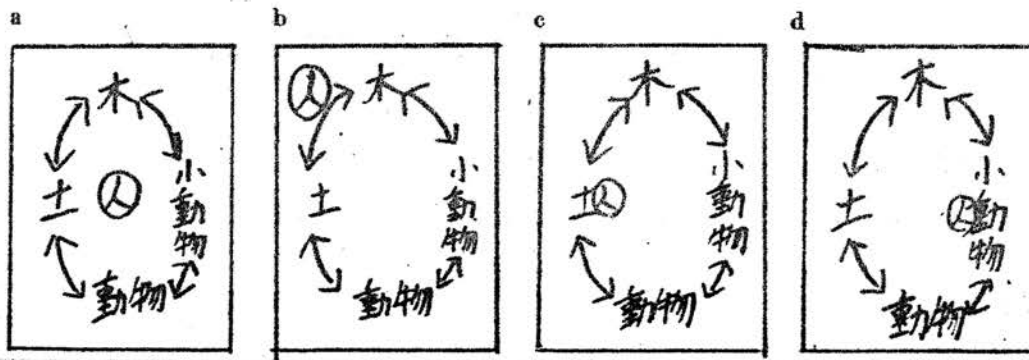
「筆者の考えがはっきりと表れていると思う文に線を引きなさい。」

第3章は5つの段落に分かれているため、最初に1つ目の段落を取り出し、線を引かせ、グループ内で確認させた。これはすぐ解答が出されたため、残りの4つの段落についても同じ作業をさせ、筆者の主張を黒板に列挙した。

次に、前時までに学習してきた自然破壊の教科書の例を想起させ、最終的な筆者の主張である、生態系から見直した自然の保護を人間はすべきだ、ということを考えさせるために、次のような中心発問をした。

「この自然の関係の中で、人間はどこにいればいいと、筆者は考えているのでしょうか。」

この反応には、次のような4つの反応が見られた。



文章に照らし合わせた検討をさせたところ、dがすぐに消去された。理由は、「人間がキクイムシのところになれば、虫が森を死なせたように、人間が森を死なすことになるからおかしい」ということであつた。次にbが問題になった。「筆者の言いたいことによれば人間も生物の一員として、外の生物たちと共に生きているということから、そのわくの外にいては、人間は生きていけないからおかしいのではないか。」というのである。そしてbも消去されたのである。残つたのはaとcである。aを支持する者は、「まず自然界の生物たちが、たがいなどんな具合につながり合い、えいきょうをあたえ合っているかを、正しく理解しておくことが大切なのである、ということから、自然全体を見ることが人間にとって必要なのではないか。」という説明をした。この意見で大勢がaに流れた。しかし別の者が、「人間も地球上の生物の一員というところから、この生物たちのつながりのどこかに人間がいなければいけないのではないか。」と出した。ここで全体の意見交流が一時とぎれた。そこで、もう一度3章全文を読み直すことを指示し、次の要約へ移った。

エ 授業実践の考察

人間と自然の好ましい関係について筆者は、生態系をふまえて考えるべきだと主張している。しかし、文章から人間が自然界のどこに位置すればよいかという明示はない。だからこのことを筆者の立場に立たせて検討させることにより、目標にせまりたかつた。よつてこの課題を設定したのである。そのため補助発問で、筆者の主張を読み取らせたかつたのである。これをバズで確認させたため、挙手は多くなつた。

これらのことを念頭において、中心発問を行つた。しかしこの中心発問は、指示が少々曖昧だつたぎらいがあつた。筆者の考えを読み取ることが主眼としたのに対し、自分の考えで人間の位置を示した児童が見られた。しかし、これは根拠説明の時、他の児童からおかしいと指摘され、それを受けた側も納得をした様子であつた。全体的には、この意見交流はやゝ活発さを欠いていた。それは、課題が児童に受けとりにくかつた

からと考えている。そこで文を読み直しては考えさせ、グループ内で自由バズにして話をさせても、意見はとどこおりがちであった。この時の挙手量は、7分の1程度であった。

またこの実践は授業研究で行ったものであるため、後の協議会で、課題と発問の関係に論及が行き、また指導過程に於いても、教師がこの課題に対してさらに切り込んで、児童に思考を続けさせるべきだ、という反省点が出された。

5. おわりに

課題とそれを生かすために、相互作用の適切な配置を考えていくことは、多少なりとも児童の授業への取り組みに変化をもたらしたと現在私は実感している。特に3、(2)のA・Bの段階に於ける挙手量はこの2つの実践で8割を越えていた。意見の確認による同調と相違が、児童一人ひとりの授業の取り組みへの刺激になったものと考えている。また検討の根拠説明の段階でも、児童はある程度文章から照らし合せた意見発表をするようになった。教師が教材解釈に立った課題追求と、指導過程で意図的に相互作用を活用していけば、児童は教師の期待を裏切らない、という感触を得たことは、私自身有益なことであった。

しかし、私にとって授業実践上の今後の課題は山積みしている。まず課題については、さらに良い課題はないか、ということである。ここでの2つの実践例でも、もっと良い課題があるのではないか、という疑問がわいてくる。さらに適当な課題を見つけることができず、不安定なまま授業をした教材がある。そうした教材に対し、どんな課題を考えていくか。また相互作用の点で、根拠説明の時に挙手量が減少するのをどうするか。昨年・本年と2年間同じ学級を担任しているが、根拠説明で意見を述べた者は、延べ人数で36名中17名にしかすぎない。1つの授業あたりでは、多くても7名どまりである。この状態をいかに活発にさせるか。

これらの課題を解決していくために、さらに実践を積み上げていきたい。

社会科学分科会
〈テーマ〉

学習集団の形成をめざして

新潟県安田町保田小学校

教諭 中野 均

1. 要旨

今の学級は、5年生から持参あがりて、男子18名、女子22名、計40名である。

5年生4月当初

- ・名前もわからない同志がいる。
- ・男女対立
- ・言葉のみだれ「死ね」「バカ」「いい気になって」
- ・自己防衛「ほくだけじゃない」「～君もやった」
- ・教師の顔色をみて行動する。
- ・指示されないと動かない。

このような雰囲気は、学習においても大きなブレーキをかけてしまう。

- ・まちがいを指摘されると泣く
- ・答えのみにこだわる。
- ・考えものをべらべらしない。
- ・発言できない。
- ・人の話を聞けない。
- ・話し合えない。

そこで学級では、子ども同志が支え合い、高まり合う学習集団づくりの過程を通して、人間関係の改善、学級の集団規律の成立、発展に取り組んできた。それによって学習の場面に全ての子どもが不安な気持ちを持つことなく参加でき、承認や参加の欲求が満たされ学習を楽しいと感じてくれるものと考える。

望ましい学習集団を次のようにとらえている。

- ・自由に話し合いのできる集団

- ・お互いが認め合える集団
- ・一人ひとりの意欲が高め合える集団
- ・学習の仕方がわかる集団
- ・各自の役割を進んで分担し、協力しておこなえる集団

このような学習集団を形成していくために、授業において小集団の話し合いを取り入れ、自分の考えや、見方をはっきりさせたり、深め合う場を設定し、学習効率を高め、それだけでなく、認め合い、支え合うあたたかい学級の雰囲気づくりを目指した。

「わからないよ」「教えて」「だからこうなるでしょ」「がんばれよ」「ヨシ」というふうに授業に誰かが安心して参加できる学級になると考えた。

2. とりくみ

① 班づくり

班内異質、男女混合を基本

1. 班長選出

班長になるのは、自分が成長するチャンス

2. メンバー

みんなが班長になった気持ちをもとう。

3. 司会者

日変わリ、恒番

4. 班のめあてやきまりを決める。

② 班の運営

・自分にきびしく、他人にきびしく
(あ・もい・やりのあるきびしさ)

・自信のない子から発言させよう。

・わからなければ聞け、聞かれたら答えよ。

③ 話し合いのやり方

・わかるところまででよいから話しこみよう。

3. 社会科(歴史)において

・今までの反省 教師

- ・これだけの事実を、すべて知らせなければ
- ・自分の感動を子どもにわかしてもらいたい
その結果、しゃべりすぎ

子ども達

- ・受身
- ・一部の子どもの活躍
- ・変容しない

・挑戦

- ・子ども自身の手によって、自ら目標、内容を
確得させたい。
 - ・歴史と対話する子どもに、
そのためには、自分をその時代に身をかく
ようにしなければ。
 - ・学習過程の工夫
学習計画を子どもとつくる。
- ↓
- ・子ども達の追求 として まとめ
 - ・教材研究

※実践資料

4. 学習集団形成度の測定

質問	答
1. このクラスでは、授業中、勉強のよくできる人だけが、かつやくしていますか。	
2. このクラスでは、授業中の発表をひとりじめするような人がいますか。	

3.	このクラスには、まちがったり失敗すると、はか にして笑う人がいますか。
4.	このクラスの人には、宿題がなくとも、家庭学習をよく やっていますか。
5.	このクラスの人には、授業中、自分の思っていることを、どん どん発表しますか。
6.	このクラスの人には、授業中、友達の発表をよく聞き ますか。
7.	このクラスの人には、まだわからない友達のために、筋 のわかったことを、どんどん発表しますか。
8.	このクラスの人には、なにか自分の問題をもって、授業に とりこんでいますか。
9.	このクラスでは、授業中、自分の思っていることを気 兼ねに発表できますか。
10.	このクラスの人には、授業のタイムになると、自分だけで 学習にとりかかりますか。
11.	このクラスでは、今まであまり発表していない人に 発表をゆずるようになっていますか。
12.	このクラスには、1日1回も授業中に発表しないよ うな人が半分以上いますか。
13.	このクラスでは、授業を先生にたよらず、みんな でやっていますか。

項目	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12		13			
	1/1	1/2	1/1	1/2	1/1	1/2	1/1	1/2	1/1	1/2	1/1	1/2	1/1	1/2	1/1	1/2	1/1	1/2	1/1	1/2	1/1	1/2	1/1	1/2	1/1	1/2	1/1	1/2
58.11.18	9	31	8	32	10	30	28	12	14	26	23	17	26	14	27	13	21	19	9	31	29	11	19	21	29	11		
59.6.11	9	31	2	38	2	38	31	9	25	15	38	2	30	10	28	12	20	20	19	21	31	9	10	30	37	3		

このように集団としては高まってきたようだが、しかし、まだ課題の追求に甘さがある。特に算教科においては、意見は出てくるが、質問してわかっていこうとする姿勢に欠ける。仲間からでた考えを、みんなの問題としてとらえ考えをいく、そんな姿勢を育てていきたい。

研究主題 歴史学習において子どものやる気をいかに育てるべきか。

滋賀県・愛知川小学校・柴田 忠

I 歴史学習のねらいとは

小学校における歴史学習の基本的な型は、やはり話し合いによって学習が進むことである。そこでは教師は今どういう方向づけが必要か、どういう資料・助言が必要かといった子どもの主体的な話し合いをより高めてやる重大な役割を果たさなければならない。

現在小学校の段階においては子どもたちに期待しているのは、歴史的事実の認知ではなく、事象や人物の受けとめ方の知的なやりとりのおもしろさを味わわせること。もう少しわかりやすく言えば、根拠に基づいて論理的かつ情感豊かに考えを交流し合うことの楽しさを学習の中で見い出してくれることである。

しかし、実態は歴史学習は教えてもらうもの、知らせてもらうもの、簡単に調べられる（答えのようなものがすぐに見つけられる）ものという意識があるようである。歴史学習は好きであると考えている子どもたちでさえ、こういう意識に合わない学習のやり方に出会うと、例えば聖徳太子がなくなると、豪族のなかでも、ことに蘇我氏が勢力をのぼし、天皇とならぶようになったという教科書の記述になぜだろうと疑問を持って、それまでのいきさつから推測して蘇我氏の思わくを考えてみようとしないのである。

私は社会は、大の大的大きらいです。なぜならば、むずかしい問題が出るからです。資料もないのに問題の答えが出るわけがありません。だからむずかしい問題などは出さないようにして、かんたんな問題だけを出してほしいと思います。もし出すとしても、すごくかんたんで5分ぐらいでできるすごくかんたんな問題を出すと、みんなわかって手を上げると思います。

(女子)

すぐ口ぐせのように社会はむづかしい。わからない。歴史はきれいだと言ってしまう子どもが案外多いのにおどろいている。現に、私の目の前の子どもたちの学習の場面をよく見てみると、考えを聞き合って相手を認めたりして深まってく様子があまり感じとれない。せいぜい各々が読んで調べた新しい事実を、学級全体の場で公表し、伝えたにすぎない。そこでは明らかになまちがいについてはきっぱりと否定され、ただ聞くことによってよくわかった(よく勉強できた)と錯覚してしまうという誤まった学習形態が見られる。

歴史を学習する最終的なねらいは、次のような事である。

- (1) 先人が過去の世の中において果たした役割を正しく理解する。
- (2) 先人やその時代の所産としての文化遺産(遺物・伝統)は貴重なものであることを理解する。
- (3) 各時代のいろいろな人間の生きざまを知り、人間の歴史とはどのようなものか考える。

教科書には、日本はこれからどのような方向に進めばいいのを見定めるために-----とある。現在の指導要領の歴史学習では、ついその目的を見誤まりやすく、そのため指導内容の多さにかに教えたらいいいのかまよい、説明型の講義になる危険性があることを心に留めておきたい。

今回いただいたテーマは、やる気を育てる授業改善であるが、これまでの実践の成功した例を紹介しようなどと考えてはいない。むしろ、この4月、子どもたちから痛烈な批判を受け、それならばいかなるものがのぞましい歴史学習なのか、そしていかに子どもたちにやる気を持たせて学習させられるか、あらためて真正面から取り組んでみようと考えた。すこしはずかしいが、子どもたちの批判をそのまま書きあげてみる。

社会の勉強について

私にとっては社会はあまり得意な教科ではありません。でも6年生の歴史の勉強になってから、だんだん興味を持ちはじめ好きになってきました。だけど、やっぱりこのごろ内容がむずかしくなってきたてわからないし、資料がないのでしらべられないからあまり発表もできません。それにやっけていても、（まちがっているかも-----）と思ってしまう手があげられません。こんな事があるので、先生にやってほしいと思う事があります。1つは、やってあっても手が上がらないので先生からあてていってほしいし、2つめは資料があまりないので、その時代のはじめに図書館で調べに行く時間を作ってほしいし、これからもどんどん資料をわたして下さい。

（女子）

社会の勉強について思うこと

ぼくは、社会の時間（発表しようかな。）と思うけど、柴田先生があまり真けんに授業をしているので、おかしい言い方や、まちがったことを言うと何か言われそうで発表する自信がなくなります。

でも柴田先生は授業中じょうだんとかめったに言わないし、真けんに

授業をしているところがいい所だと思います。でも柴田先生が授業をしていると、へやの中が静かな時が多いし暗い感じがするので、たまにはじょうだんを言ってへやの中を明るくしてほしいです。ぼくが4年生の時は、柴田先生も今よりじょうだんを言うのが多かったし、授業中もうるさいぐらいだったので4年生の時のような授業もしてほしいです。

(男子)

社会の授業について

ぼくは社会の勉強は、よくしていないことが悪いと思いました。みんなも発表したりしたら、もっと早く終わったと思います。予習をしておいたら、その時ぱっと発表できると思います。ぼくは、よくひとりで歴史のマンガをよんでいてもおもしろいからやっぱり社会にきょうみを持たさなければおもしろくないと思います。それさえできればたのしくできると思います。だから図書館で本をよますことが第一だと思います。

(男子)

II 子どもにとってのやる気とは

はたして子どもたちはどういう学習の仕方ならば、やる気を出すのであろうか。私の場合、これがまず明らかにしなければならない課題であった。

ぼくは社会の勉強はきらいだ。それはみじかい文で大きい問題を見つけなきゃいけないからだ。それもその問題は、わかりやすく意味が通らなきゃいけない。そんな問題は1人ではできない。班で話し合い、あれ

よこれよというのも楽しい。それに先生が先に勉強をして、しりょうをくれるのもたのしいな。
(男子)

子どもの意見をまとめてみると次のようなことである。

- かんたんな問題でだれでもすぐ答えられる時。
- 教師からも友だちからも気楽に話しかけるように話ができる時。
- 新しい資料がどんどんもらえ、いろいろな事を知ることができる時。
- 習っている時代のことがよくわかり意味もよくわかる時。

ここでいうやる気を出すとは、どんどん自分の気持ちや質問に対して意見を言うことのようなのである。

このように子どもたちは教師に対する希望を述べている。いかがなものだろうか。はたして子どものいうように、教師のけんきよな反省に子どものやる気が起こるとすれば授業はできるのかどうか疑問に思う。子どもは学習をするわけであるが、同時に教師も授業をしているのである。単に進め方の問題でなくどんな授業をすれば、子どもはやる気をもって学習にのぞむのか真剣に考えてみたい。

やはり教師は、内容的なやさしさ(すぐわかる)雰囲気的なゆかいさ(じょうだん)気分的気楽さ(ざっくばらん)のみに流されるのではなく、まず歴史学習のねらいに合った内容をしっかりとおさえること。そして子ども主体の話合いの場を意図的に仕組み、資料をタイミング良く提示し深まりをつけ、又適切な助言をし、方向づけをしてやるという大切な役割を認識しておきたい。

Ⅲ 小集団学習をとり入れるとは

そこで学習の出発をどうするかであるが、歴史学習については残念ながら教科書の記述だけからでは、おおよその時代背景はとらえられても驚きや感動を生み出したり、その時代を生きた人物の熱い生きざまを語り合うことはどうて

い望めない。しかし、だからといって歴史的事実や人物との出会いから、学習問題をつくるまでを教師の主導型で進めたのでは、いかに興味ある課題が結果的に設定されても終始やる気ある話し合い学習は展開しないのではないか。このことは子どもの作文にも如実にあらわれている。

社会の時間、私は自分で何をしているかわかりません。私は社会の宿題（課題）が出ていなかったら何もしていません。家で買っているポピーを調べて問題をしてはいますが、資料集など買ってもらってもなかなか調べられません。お父さんにおしえてと言っても、よく社会の本を読んでからしなさいと言われるだけです。私は、社会の本でもまともに読めないんだからどうしようもないと思っています。 (女子)

この子どもがグループや友だちとすると安心できるからいいと言っている。グループで自分たちが学習する問題づくりをして、自分のわからないことがわかってくると言っている。又、ある男の子は次のように言っている。

ぼくは班で話し合ってるのはすきだ。みんながよく考えられるし、協力しやすい。けれど先生に言われるとちょっとわかりにくくなる。時には変なことを考えていたりすることもあるけどあまりきんちょうしないからです。 (男子)

これらの子どもの作文にあるように、班学習とか小集団での学習が子どもたちにとっては、安心して相談を持ちかけられる場であるようである。又同時にひとりひとりがどれくらい自主的に取りくんだかがするどく評価される場でもある。私は小集団学習の場を次のようにとらえている。

(1) 他人とのきびしい対決の場である。(自分の甘さを知る場)

(2) 協力と分担を強いられる場である。

(3) 自由になごやかに自己表現できる場である。(気楽に対話できる場)

私は学習形態を大むね次のように考えている。

A 学習計画づくりの段階

- 歴史的事実、人物との出会い〈教科書〉
- 時代背景をよりくわしくとらえる〈資料〉 — 全体学習
- 学習問題づくりと練りあい — 小集団学習
- 学習問題の決定と解決の手だて、調べ方を明らかにする — 全体学習
- 一人調べ(家庭学習) — 個人

B 小集団学習で交流し合う段階

- 考えを出し合い、たしかめる — 小集団学習

C 小集団学習を生かし深める段階

- 指導のねらいにそってより深く理解させ、より鋭く多面的に考えさせる
〈資料と助言〉 — 全体学習

D 学習の成果を明らかにする段階

- 作業を通して学習をふりかえる — 小集団学習

「元こうと鎌倉幕府」の学習を例に取り上げてみると、元こうは、国家的危機であり、子どもたちにとって興味ある出会いである。練り合いの結果、元との戦いと、まもなくおとずれる幕府滅亡を結びつける予想を立てた。

学習問題「元との戦いのえいきょうと幕府がほろんだ原因は何だろう」

解決の手だて(調べ方)

- 元こうがどんな戦いだったかをもらった資料で読んでくる。(読み物)
- 元こうの結果、幕府にとって良かったことと良くなかったことを整理してくる。(資料集)
- 御家人や農民、朝廷、公家は、それぞれどのように考えていたか、考え

てくる。

・元寇のあとの世の中の出来事から、元寇のえいきょうや幕府の衰退（おとろえ）と思われることを年表で調べる。

・幕府は、だれによってどのようにほろぼされたか調べる。

一人調べを交流し合う小集団学習を生かし理解を深めるための指導のねらいは、必死の元との戦いは御家人や幕府に勝利をもたらした世の中での武士への信頼をより一層高めることになった。一方武士の生活を苦しくし、幕府に対する不満を高まらせ信用をなくすことになり、幕府の対応にもかかわらず内からくずれ、やがて幕府をほろぼす大きな原因となったことを考えさせるものである。

元寇での御家人たちの戦いぶりや活躍ぶりに心に強くうったえるものがあったのであろう。小集団学習での議論が武士の思いに集中して白熱したようである。

今日は面白い勉強だった。とうとう発表はできなかったが、（言おうかな。）と思っているうちに、自分の考えがどんどん変わって行って言えなかった。 (男子)

今日は1回だけだけど全体でする時発表できました。班の中ではわりとよく言っていたけど、全体の時は言おうと思っていたんだけど先生が言い出したので言いそこねました。黒板には先生が、自分で言ったのだけでなく、みんながいっしょけんめい言ったものやぼくが調べたものも書いてあっておもしろかった。 (男子)

授業の中で教師が意欲的にしかも意図的に前面に出てくることは、かならずしも悪いことではないと私は考えている。「先生の考え方はおかしいか?」とよくたずねることがあるが、大人の発想や個性的なとらえ方を互いにぶつける楽しさを私は味わいたいといつも考えている。子どもたちのやる気の高まりを常に感知しながら、それ以上の今一つのがんばり（あえてむずかしい課題や方向を言われた時にもあきらめないでくいついていくねばりを、教師も含めた集団の中で共に学ぶ姿勢として示すこと）を期待しているのである。

IV さいごに

小集団学習は明らかに目的のある、指導のねらいにせまっていくための大切なステップ（段階）である。やみくもに意見が出ない時やあせりを気休めにするためにさせるものではない。又、やる気とは出させるものではなく、育てきるものである。つまり、子どもに主体的な学習態度を身につけさせて初めて値うちのあるものである。

現実には問題がいろいろ残っているように思う。一つは問題解決的にすべてを子どもに任せきりだけの時間的余裕がないこと。二つめは今の子どもたちには、困難に耐えてどこまでもくいついていくだけの強固な精神力が欠如していること。三つめは人間関係の問題で、真に開放された学級づくりが困難であること。そしてさいごに、良きリーダーの育成の問題である。

今日も発表はすることができたからよかったと思う。しかし1回の発表に言いたいことをすべて言うことはできなかったのでよくなかったと反省している。はっきり言ってあまり社会の学習は好きではない、というより何かおもしろくない。なぜかと言うと、ほとんどの人があまり意見を言わない。言い争うことがない。もっと議論したいです。（男子）

ほんとに班長なんか代わらなかつたらよかった。久保君もあし田さんも、えみさんもあんまり発言しない。それでぼくがして、もり上げようと思ってやりやすいように、「久保君が班長やって」と言ったけど、ほんでじっと待ってたら、しまいには時間がなくなってしまう。それで個人発表するのかなと思っていたら、よけだまって書いていただけだから、考えてるかもしれないけれどじっと見えてやって。みんなもっと発表してくれないかな。

(男子)

子どもながらにそれぞれ悩みを持っているようである。ひとりひとりに答えてやれる指導こそ今後に残された大切な課題である。

ご批判、ご指導をよろしく願いたい。



第4分科会

研究主題 やる気と育てる授業改善(算数で)

愛知県 春日井市立小野小学校 辻 善造

1. はじめに

一斉学習の中では、子どもたちの自己表現・承認の欲求が十分に口になえず、意欲が低くなりがちである。そこで、2人組や小グループの中で、相互刺激・ささえ合い・相互評価ができるような話し合い・確かめ合いの場を設け、それらの欲求をより満たし、意欲を高めたい。

1年の算数を中心として、グループ学習を利用することから、次の4点に留意する。

ア. 生活と教理の未分化の状態から、漸次分化の方向に向かう段階にある。そのため、生活に立脚した活動(ゲームも含む)を通して、その背後にある教理を感覚的にとらえさせる。

イ. 1つのことを静的に持続して考えることは苦手なので、興味・関心を喚起するような変化に富んだ動的な取り組みが必要になる。その1つの方法として、2人組のゲームを多く利用する。

ウ. 認知レベルが“活動的レベル→映像的レベル→記号的レベル”とある。そこで、認知させたいレベルで、表現し合わせることで、認知をより確かなものにする。

エ. 入学前から、教え方などを知っている者は多くいる。しかし、教の構成的意味(ある教と他の教との関係、または、その他の教への交流のしかた)のわかっている者は、少ない。そこで、この点にも留意して指導する。

2. 実践例

グループ学習を効果的に利用することで、意欲を高める工夫とした実践例をあげてみる。教と計算の領域に焦点をあわせて、7月までの単元(啓林館の教科書による)を系統的に取り上げてみた。それぞれの単元において、ポイントになることも書き添えた。(○印がポイント、●印が実践例)

① 具体物と半具体物とを対応させるながら、5までの教の概念を養う。

○ 具体物と教の具体的表現であるおはじき(時により教図カードを使う)に基づかせ、拠り所をはっきりと意識させる。

4-7-1

- 2人組で、一方が教室内のある物と同じ数のおはじきを示し、「これと同じ数だけある物は何か。」と問い、他方がその物の名前と唱え方と表記を答える。
- 2人組で、一方からこのおはじきを2つに分けて握り、「いくつといくつ(順序は問わない)」と問い、他方が唱え方で答える。交互に問題を出し合い、正答数を競う。ここでの認知レベルは、活動的レベルのようだけだが、出題者の握っている時、念頭におはじきをえかく、映像的レベルをねらう。

② 10までの数について、順序よく教えさせ、計量数としての理解を図る。

- 興味をそらさないため、教える場に変化を持たせる。教える場として、視覚とおして(動かないもの、動くもの、動作の回数など)教えたり、聴覚とおして教える場を設ける。
- 2人組で、一方が手をたたいたり、手をふったりして、それが何回か問い、他方がその数を唱え、表記する。
- 2人組で、抜き取ったカードあてゲーム。一方が1~10までのカードのうち1枚を抜き、他の9枚をばらばらにし、「何が足りないか。」と問い、他方がそれを当てる。

③ 10までの数について、順序の意味を理解させる。

- 計量数との具体的対比をともに、順序数を理解させる。
- グループごと、それぞれ一列ずつに並ぶ。そして、「前から、○番目の人、手を挙げなさい。」とか、「後ろから○人立ちなさい。」とか発問し、動作を通して印象づけ、ねらうを図る。
- 2人組で、カード並べ競争。1~10までの数字カードと、それと同形同大の白紙のカードを1枚作って合計11枚を準備する。1枚を裏向けにしてよくきり、10枚を並べ、1枚を残す。残ったカードを見て、その位置のカードと取り換える。取り換えたカードを見て、同じことを繰り返す。そして、白紙が出たら、ゲームは終了。カードをたくさん表にした方が勝ち。

④ 6, 7, 8, 9の合成・分解ができる。

- 数の構成的意味(8という数は、2と6を合わせたものとみたり、3と5に分けられたりするとみる。)を知らせることで、数観念を養う。今後の計算は、数観念をともに計算することが望ましいため、興味を持たせながら習熟を図る。

- 素材としては、さいころ、おはじき等具体的レベルの物が
多いが、いくつといくつかを念頭にえがいたり、習熟により
瞬時にできるなど記号的レベルまで高めたい。
- 2人組で、7になあれゲーム。2人でじゃんけんをして、
負けた児童が、まずさいころを投げる。次に出た目を見て、
2人で7になる数を話し合わせる。そして、勝った児童が、
さいころをふる。目標の数が出たら勝ちで、出なかつたら投
げる順番を変えて、ゲームを続ける。
- 2人組で、7つのおはじきを2つに分けて握り、いくつと
いくつゲーム。

⑤ 10の合成・分解ができるようにし、10の補数関係と理解さ
せる。

- くり上がり・くり下がりのある計算と数観念を基として
やる上で、基礎になる。そこで、9とあたりがすぐに念頭にう
かぶまで、習熟させなければならない。
- 2人組で、10このおはじきを2つに分けて握り、いくつと
いくつゲーム。ここでの認知レベルは、具体的レベルから映
像的レベルだが、次のゲームでは記号的レベルまでねらうの
で、その素地にもさせたい。
- 2人1組になって、1~9までの数字カードを1組ずつ用
意する。一方が、自分のカードを表に向けて任意に並べる。
他方は、自分のカードを裏向けにしてよく切り、端から順に
並べる。任意のカードを1枚表に向け、そのカードの補数関
係にあるカードの下に置き、そこにあるカードをめくる。こ
のようなことを順に繰り返す。カードがめくられなくなつた
ら、ゲームを終わる。交代して同様のことをやり、表に向け
たカードの多さで勝負する。

⑥ たし算、(1位数) + (1位数) < 10以下、が用いられ
る場面を理解させ、表記・読み・書きを知らせる。

- 増加(合併)の場面に結びつくことは(来る、生まれる、
飛んでくる、入れる、もらう等)を大切にし、おはじきを具
体的に操作させながら、増加(合併)の意味を理解させる。
- 2人組で、一方がおはじきを使いながら、増加(合併)の
作問をする。他方が、式と答えを書く。
- グループ対抗で、計算競争をする。5問ずつで区切りを
つけて、満点か正答数が上がった時1点ずつを与え、理対抗の

得点競争をする。ここで、一斉では意欲の弱い児童も、班のみんなのためと意欲を高める。また、答え合わせも2人組で交換して行うことで、承認の欲求も満たされる。さらに、計算練習では、「こんなによくなった」と成果がはっきり見え、学習意欲を高めるためにも役立つ。

⑦ ひき算 (1位数) - (1位数) が用いられる場面を理解させ、表記・読み・書きを知らせる。

- 求残の場面に結びつくことは大切にし、おはじきき操作させながら理解させる。
- 求差の問題を、生活場面や切り絵を素材にして、具体的に操作を通して理解させる。そして、操作により、求差は求残に似ていると感覚的にとらえさせる。
- 差を出すため「何かから何をとった。」と発問し、具体的に操作を通して考えさせる。そして、説明できる者には、表出の場を手えるため、隣りに話させる。その上で、代表者に全員の前で発表させる。その後、確認のため、隣りどうして説明のし合いをする。
- たし算と同じように、グループ対抗で計算競争をする。

3. おわりに

実践より意欲を高める要因を取り出してみると、次の4つになる。

- ア、できた喜び・自信を持つこと。
 - イ、考える手だてを持っていること。
 - ウ、自分の考えをわかってとらえる場があること。
 - エ、わからない所をマンツーマンに近く聞ける場があること。
- これらの要因を、授業の中でより表れるように、つぎのように留意していきたいと思う。

アは、計算で成果が出やすいと思う。珠算の意欲化として級があるように、学力差を配慮しながら到達基準を設けたい。

イは、抽象的な教理の具体的な表れを手え、それをじかに操作させたり、念頭で操作させたりする。そのため、おはじき・教え棒・絵図などを効果的に使う工夫をしたい。

ウ、エは、2人組や小グループで、考えを発表させる場を設けたい。この時、考えを伝える手だてをイの工夫とともに指導していきたい。

研究主題

バス学習を取り入れた教育課程の実践と深化

特別活動におけるバス学習の展開

岩手県盛岡市立河南中学校

目 録 奏

1. はじめに

- (1) バス学習実践の経過 教科指導の中にバス学習を取り入れてから4年目を迎える。56年之学期より実践に入り、基礎的自主公開。57年度は市教委指定公開。そして58年度は発展的自主公開と連続して実践の様子を公開しながら、バス学習の実践をすすめてきている。

昨年までは、教科面に重点をおいてきたが、教科のみではバス学習としての深化や発展も不十分ではないかという反省にたって、59年度の今年は特活分野の実践にも一歩踏み込んでみようと考えている。

- (2) 学区・生徒の概要 全校生徒約670名。県都盛岡市内に位置してはいるが、大慈寺小学校学区の商工業地域、中野小学校学区の農林業・住宅街地域、並びに49年度吸収統合となった築川四地区(川目・築川・根田茂・砂子沢)の農山村地域からなり、極めて広域の学区となっている。それとともに、生徒の地域環境も、父母の生活様式等も多様化している。

58年度には、創立30周年を迎えている。

生徒達は都市部の生徒にしては、自己表現力に欠けるところもあり、言語生活面で力の弱いところがある。この生徒達に、どうにかして自己表現力をつけさせるかという課題のもとに、バズ学習の導入に踏み込んだ契機ともなっている。全体的には木訥で親しみやすいところを持っている。しかし、東北新幹線の開業、テレビ・マンガ等の影響を受けている面も多々ある。

2. 特別活動と教科を統合した「行事」を核として

前記、49年度の吸収統合は学校教育の種々の分野で大きな影響を与えた。プラスとなった面も勿論あったが、最悪 Km という物理的条件から発生する克服すべき課題も多く出されてきた。

このような中で、この数年その課題を解決すべく色々な試みと実践を積み上げてきている。これらの実践の中には、「河津中の伝統」として生徒達にも深く根をおろしているものもある。

これらの特別活動を再度見直し、バズ学習の中に組み込む方法を思考し、更に新しい段階と質的向上を旨として一步踏み込んだところである。また、教科におけるバズ学習の成果を、種々の特別活動と一体化できるように模索中である。

3. 発表時、言及したい項目

- (1) 入学式・卒修式（初めての授業と、そして最後の授業として）
- (2) 文化活動発表会
- (3) 学芸行事
- (4) 生徒会（正義をバネに——自己自浄の行動）
- (5) その他

学習集団と生活集団の統合をめざす

－ バズを活用した生徒会・学級会活動 －

愛知県春日井市立中部中学校 梶田久忠

1・地域・生徒の実態

(1)地域の实態

春日井市は名古屋のベッドタウンとして、人口25万人を数える。本校はその中央部に位置し、校区内に36000余名が居住している。職業分布をみると、製造業が全体の37.5%を占め、建設業・サービス業が12%台でつづく。本校の東隣には、王子製紙春日井工場がある。

(2)生徒の実態

市内37小学校のうち、本校には、勝川・小野・上条の3小学校から進学してくる。生徒数は、1683名、41学級（うち実務学級2）、/学年、12～14学級で構成されている。校地も49,276m²あり、東海地方一の規模をほこり、クラブ活動も積極的に運営され、本年は5つの運動クラブが県大会に出場した。文化クラブも各種コンクールに好成績をおさめている。

学校運営面では、教師の管理的な指導が多く、非行は少ない反面、登校拒否気味の生徒が増加する傾向がみられ、その対策を迫られている。

(3)生徒会活動の実態と特別活動

本来、学校教育のなかでの特別活動は、個々の生徒の多様な活動を保障したもので、そのなかの生徒会活動は、生徒の自発的・自治的な活動により、学校生活の充実や改善・向上を図ろうとするものである。しかし、本校は3年ほど前までは、大規模校にありがちな職員主導の特別活動であった。生徒会活動においても消極的であり、執行部への立候補者もそろわない状態であった。一般生徒の関心も薄く、また各種の生徒会活動も、職員会議で決まった事を実行する「下請けの生徒会」「活動のない生徒会」であった。そこには、生徒自身の思考・活動がみられなかった。そんな生徒会活動を転換するでき事がおこった。

昭和57年度後期生徒総会において、後期の活動方針案が、生徒たちのやる気のなさのために否決されてしまった。たとえば、長距離継走大会については、“冬の寒い時期になぜやるんだ。”という雰囲気が生まれてしまった。生徒自身の手で考えた“腕ずもうナンバー1”“縄とびナンバー1”等を

選ぶ「中部ナンバー1」という、新執行部の提案した活動ですら、大会の雰囲気でも否決されてしまった。

生徒総会における執行部案否決というでき事は、生徒会の執行部にとっても、それを指導する教師集団にとっても大変なショックを与えた。そして、このような状態をなんとかしなくてはならないという気持ちが高まっていった。執行部案否決の事態をうけて、各クラスごとにその原因をもとめて討議がおこなわれた。その結果、生徒会活動に対する十分な話し合いが、各クラスでおこなわれていなかったことがあきらかになった。

2・実態をふまえ仮説としての対策

(1)学校教育全般を通して

学校においては、生徒の人間として調和のとれた育成をめざし、地域や学校の実態および、生徒の心身の発達段階と特性を十分考慮して、適切な教育課程が編成されている。そして、個々の生徒の能力・適性等を的確な把握に努め、各教科・道徳・特別活動・学校行事等、学校の教育活動を通じて、生徒がすべて、もしくはいずれか一つでも生き生きと活動できる場をつくりだすことができるならば、生徒の学校生活の充実感・存在感を育成することができ、そしてその過程で、生徒自身や全体のモラルを高めることができるのではないかと考え、生徒を育てる方向をとることになった。

(2)特別活動を通して

①特別活動の方向づけ

委員会は生徒会の下部組織であり、各クラスの代表委員が構成している。クラスの全ての生徒が、学級会活動のいずれかの委員会の部に所属して活動するが、委員会にクラスの意見が反映され、委員会の決定事項を周知させていくには、学級での話し合いが大切である。そこで話し合い活動をより活発にするために「バズ」を導入した。バズを通じて、一般生徒も間接的ながらも、生徒評議会・委員会に自らの意見を反映させているという実感をもつことができると考えた。特に生徒会の収集活動については、生徒の自主性・主体性の生きるものとして、生徒自身が生徒会活動に参加し、ひいては、生徒自身が学校生活をより有意義にしようとする推進力になっていくと考え、これらが連鎖して、学校生活全般・集団生活の向上につながると仮説をたて、研究実践に取りくんだ。

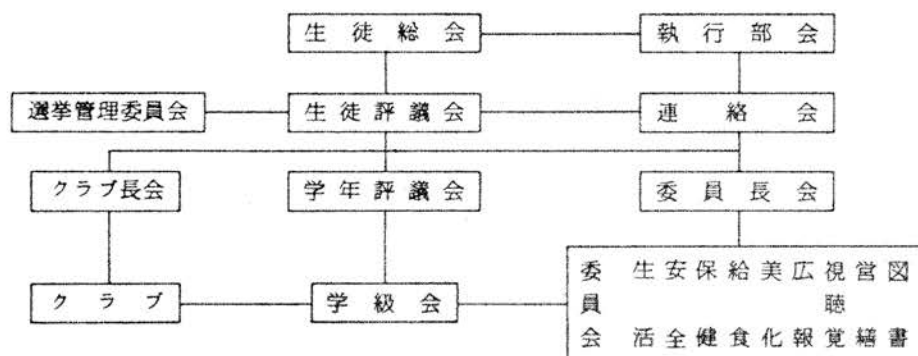
②特別活動の基本方針

- ア. 所属集団の中における存在感の育成を通して、望ましい人間関係の育成に努める。
- イ. 楽しく、規律正しい学校生活の確立に努める。
- ウ. 委員会活動・学級会活動・クラブ活動を活発にし、自主的・実践的な

活動を、助長するとともに、健全な趣味、豊かな教養を養ない、個性の伸長、学校生活の充実感を育てる。

エ. 生徒の主体的な活動を通して、互いの立場の尊重、連帯感、個々の能力の向上をはかり、生徒指導の一手段として非行防止に努める。

③ 生徒活動の運営組織



(3) 生徒指導の面から

昭和57年度後期生徒会活動方針案の否決、一部の生徒のやる気のなさが前面に出てしまい、会場の雰囲気がかわされてしまった。この反省から、生徒個々の自分勝手な言動を慎しませることが生徒指導上大切であるという認識が教師間に高まった。非行問題は低次元的な発想なものが多く、学級会にて学級の諸問題をできるだけ取りあげ、積極的な話し合いを通して、解決方法を見い出したり、全員が一人ひとりで学級の係活動を分担し、責任と仕事の遂行の喜びを感じるなかで、集団への連帯感の育成につながる。それが全体のモラルを高めることになり、非行防止につはがると考えた。

3. 生徒会活動での実践

(1) 昭和59年度前期生徒会活動の重点目標

- ・ 生徒会活動への関心を高めるための建設的な広報活動を促進する。
- ・ ベルマーク、アルミ缶、古新聞等の収集活動に積極的に協力し、クラスの備品の購入、催し物の実施を通して、活動の成果を知らせるとともに、生徒会活動を盛りあげていこうとする態度を養う。
- ・ 委員会活動の一層の充実をはかるとともに、執行部との連携を密にする。
- ・ クラブ活動・学級会活動などとの関連を明確にし、連携を密にする。
- ・ 適切な指導のもと自主的活動を盛りあげ、明るく楽しい学校生活を生む校風づくりに努める。
- ・ 学活・STを有効に使い、生徒会活動を広範なものとし、生徒一人ひとりの

所属感・連帯感を高める。

(2)昭和59年度 前期生徒会活動計画

	第1週	第2週	第3週	第4週	常時活動
4月	入学式 離任式	クラブ紹介	緑の羽根募金	前期生徒総会	↑ ・ 毎週/回生徒会新聞の発行 ・ ベルマーク・アルミ缶の収集活動 ↓
5月			5センチ運動	/年球技大会	
6月	球技大会を もりあげよう	2・3年 球技大会	5センチ運動		
7月			5センチ運動 運動選手 激励会		
8月					
9月	大会報告会	水泳大会	5センチ運動 複十字シール		
10月	赤い羽根募金	5センチ運動		後期生徒会 役員選挙	

※生徒会より収集活動の収益金によって購入したバレーボールが各クラスに3年生には電気鉛筆削りが貸し出されている。

(3)具体的な取り組み・・・生徒会活動を活発にするための工夫

①収集活動の充実と生徒会行事の実施

本校の生徒会会費としての収入は、年間4万円と少なく、他の活動費は生徒自身の手による収集活動によって賄われる。

ア・5センチ運動

「5センチ運動」とは、月/回、全校生徒が古新聞を厚さ5センチ以上持ちより、それを生徒会が集約し、古紙回収業者に売り渡した収益金で生徒会の独自の活動をしようとするものである。収集活動の基本は、ともすると教師の下請け的活動が多くなり、形式化する生徒会活動を主体となって活動しようとするものである。

9月の第4回5センチ運動の収益は、62,070円あり、1683名の生徒（欠席者も含む）のうち、3日間とも持ってこなかったり忘れた生徒は、わずか20名で98.8%の参加という好成績をおさめた。収益金の使い道については、クラスの意見を反映させて評議会にて話し合われる。57年度は、正面玄関前の池に、70センチ級のコイを2ひき、58年度は学裁の時間を利用して、体育館にて松竹映画「裸の大將放浪記・山下清物語」が上映され生徒に強い感動を与えた。本年は収益金として50万円が予定されており、9月の末の評議会において、映画会の開催が決定し、後期の執行部がその実施に取り組むことになる。9月の収集活動では、41クラス中30クラスが全員持ちより、生徒会より、意欲的に参加したクラスとして感謝状が集会時に贈られた。全員参加できなかったクラスは、学級会にて、その反省を話し合い、クラスの取り組み方の改善をはかっている。

イ・ベルマークの収集活動 / 学期分の収集結果 89,163.85円

57年度58年度での収集結果、27万余円の預金があり、先年度末に“黒板ぬぐいクリーナー”13台が購入されることになった。

ウ・アルミ缶の収集活動 / 学期分の収集結果 31,303 円

クラス対抗としての収集活動は、脱靴室にクラスごとの収集状態を示すグラフが掲示され、また多く集めてきたクラスは、生徒会新聞に紹介されている。全て、生徒の手により、アルミ缶スチール缶の選別、押しつぶし作業、点数化等がおこなわれている。クラスによっては、クラスメートの意識化をはかるために数十種類のアルミ缶が展示されている。

②生徒会新聞の発行

評議員各学年2名、計6名が中心となって記事を書き、毎週1枚発行している。内容は、当初委員会からの連絡等が多かったが、現在では、収集活動の取り組み状況と工夫、各クラブの活動状況、夏の大会の報告学校行事・校内トピックスと幅広いものになってきている。学級に1部ずつ配布され掲示されているが、誰でも記事を書き、新聞づくりに参加できるので、クラス・クラブ自慢を通じて、生徒会員としての充実感・存在感の育成に一役をになっている。

③学校行事の一部を生徒会に立案・運営させる

ア・離任式

御世話になった先生ごとに生徒代表が体育館の壇上にて御指導の一端を紹介するとともに感謝の言葉を贈り、別れをおしんでいる。体

育館に離任される先生にまつわる言葉の垂幕をかかがたり、花文字がかざりつけられる。また、収集活動の収益金で記念品や花たばを贈っている。

イ・水泳大会

計画・立案・運営まで、生徒が前面にでておこなわれている。リクレーション種目など、学年生徒会が工夫をこらし、騎馬戦レースや二人三脚などの種目決定をしている。また、計時・記録係の紹介をはじめ係ごとに帽子で色わけをおこない、運営の責任表示をしている。

ウ・球技大会・長距離継走大会

関係クラブの応援をもとめ、生徒自身が意欲的に参加できるような工夫をしている。

エ・卒業生を送る会・素人芸能大会

三年生の卒業を祝うとともに、感謝の意をあらわす場としている。素人のど自慢大会や全員合唱・職員合唱など盛りたくさんで楽しいひとときをつくりだしている。また、会の終わりに、一年生が作ったしおりを三年生一人ひとりに贈っている。

オ・卒業式

当日の朝、登校してくる卒業生の胸に二年生手づくりのカーネーションのペーパークラフトを贈っている。また、校舎の窓には、一文字B紙大の花文字「ごそつぎょうおめでとございます」を飾りつけている。

④生徒会選挙の改善

日頃の生徒会活動を通じて一般生徒がどれだけ生徒会活動に感心をもってきたか、生徒会活動の主体者となってきたかを占うものでもある。一年生時には、クラスの代表を生徒会におくろうと呼びかけ、多くの者が立候補する雰囲気づくりに心がけている。二・三年時になると“生徒会活動はこうすればもっと活発になるのではないか。”と目的意識をもった者が多数立候補するまでになった。毎回、20～30名弱の者が立候補しており前期の選挙で落選しても後期の選挙に再度立候補する者も多く、落選しても、クラスの評議員として生徒会活動の運営に参加する者も多い。

大規模校でもあり、個々の立候補者を知ってもらうために、朝の脱靴室でのアピールをはじめ、給食時のクラス訪問を取り入れ、生徒会活動への抱負・質問の時間になっている。立ち合い演説会も、立候補者が多く、時間的にも無理があるため、体育館で、一つか二つのテーマにもとづく公開討論会の形式を採用している。

4・生徒会活動への取り組みと学級会

(1)5センチ運動の反省(1年6組学級会)

- ・ 今回の5センチ運動へどのように取りくんだか説明を聞く。

☆合言葉“みんなで215センチを達成しよう”を決めた先回の学級会の報告を聞く。

☆参加状況・5センチ持って来た人・・・15人
5センチ以上持って来た人・・・24人
忘れた人・・・4人

☆第3回5センチ運動の収益 58,360円

- ・ 班で5センチ運動の反省をする。うまくいった班と、うまくいかなかった班の発表を聞く。

☆班の発表

(A)持って来た人が多かったが忘れた人がいて残念だった。

(B)持って来るのをすっかり忘れてしまった。

(C)班競争だったのでたくさん持って来た。

(D)持って来た人は、忘れた人をカバーできてよかった。

(E)持って来ても5センチちょうどだった。

(F)持って来る人と持って来ない人の差がめだった。

- ・ うまくいった班と、うまくいかなかった班の反省を聞いてどんな事を感じたか。

- ・ 目標以上に取りくむことのできた班と、そうでなかった班と、どこからそのちがいが生まれたのか話しあう。

(G)班競争のことしか考えていなかった。

(H)新聞を持って来ようという意識の差があらわれた。・・・4班6班

(I)みんなに勝ちたいという意識の差。・・・2班

(J)家にあった新聞の差。

(K)生徒会に協力しようという気持ちの差。・・・7班

(L)5センチ以上持って来た人は生徒会に協力しようという気持ちが強く、5センチ持って来た人たちは、ただ持って来ただけではないか。・・・5班

(M)生徒会に協力的か協力的でないかの差。・・・8班

(N)生徒会活動を活発にし、早く映画を見たいから持って来た。・・・1班

- ・ 司会者が学級会のまとめをする。

(司会者)・・・5センチ運動を通じて自分達が生徒会に協力しているうちに、自分達の生徒会ということがあらためてわかったと思います。だから、みんなが協力すると同時に、学校の備品を買ったり・行事を行ったり・学校で生活していくなかで役立てるために収集活動をしている。

(評議員)・・・今日の学級会の意見をもとに、これからも収集活動を行っていきますので、みなさんも協力して、中部中学校をよりよくしていこう。

生徒の意識調査

1. 生徒会に協力しようという気持ちの差・・・17名
2. 家にあった新聞の差・・・10名
3. 新聞を持ってこようという意志の差・・・9名
4. 5センチ以上持って来ると重たいから・・・2名
5. 兄弟の関係で持って来るのに差があった・・・1名
6. その他・・・4名

(2) 5センチ運動の取り組み方について (2年8組学級会)

議題「最終日に2人忘れれが、取りに帰ることにより、クラスの全員が5センチ運動に参加することができた。今後の取り組み方について話し合おう。」

・班で話し合う。

- (1班) 取りに帰って良かった。取りに帰らないと今度忘れる者が増えるといけないから。
- (2班) 今回は取りに帰っはが、次回の5センチ運動に忘れたら10センチ持って来させる。それでも忘れたら20センチにする。
- (3班) 10組のように2日間で集める。2日目に忘れた者が取りに帰れば、3日間で100%が達成できる。
- (4班) とにかく全員持って来たことは事実であり、生徒会から感謝状がもらえることはいいことだ。
- (5班) 4班の意見とは反対で、感謝状なんかいらなと言ったらウンになるけど、もっと真面目に取り組むべきだ。
- (6班) 新聞を忘れた者は、もっとベルマーク、アルミ缶を持って来るべきだ。
- (7班) 実際、2人土曜日の朝に忘れたことは事実であり、取りに帰ったことで、100%達成クラスとして、感謝状をもらうのはおかしいのではないか。
- (8班) たった2人のためにクラスの団結がこわれようとしている。2人はもっと自覚すべきである。

・他班の意見を聞いて再度話し合おう。

- (4班) みんなが期日どりに新聞を持って来れたから、そこからクラスの雰囲気はよくなっていくと思うし、これからは感謝状はどうでもいいから全員が期日内に5センチ持ってこれるように努力しよう。
- (6班) このクラスにも兄弟が中部中に3人もいる者や、新聞を取っていない者もいるので、その分をみんなの協力でカバーできないか。

(1班) やはり、土曜日に忘れたことは事実であり、7班の言うとうり感謝状は辞退すべきである。目には見えないけど、みんなが取りに帰ったりしてがんばったという心の賞状があるのではないか。

(8班) ただ持ってきているだけの者もいると思うが、何のために5センチ運動があるのか、もう一度考えなおす時期ではないか。

・話し合いのまとめをしよう。

生徒会の100%達成クラスとしての感謝状は、今回は辞退しよう。「5センチ運動にただ持ってくれだよ。」という安易な考えではなく自分達で活動するための財源であることをお互いに再確認し、次回ががんばろう。

(3)学級のボールとベルマーク (2年8組学級会)

議題「先日A君らが教室にて生徒会のボールで遊んでいたところをB先生に見つかり、ボールを取りあげられてしまったことについて。」

・班で話し合おう。

(3班) A君がボールを取りあげられるのは3回目であり、もっと反省すべきである。

(1班) ガラスを破ったりするといけないから当然ではないか。

(8班) A君らが遊んでいたのをそばで見ていた者もいたのに、彼らが注意できなかったことを話し合うべきではないか。

(4班) 外で使用すべきボールだから当然であるが、そのために他の者がボールを使用できず、球技大会の練習ができなくなったことを真剣に考えよう。

(7班) A君らばかりを責めたてるのは良くないと思う。たまたまA君が運悪く3回見つかっただけで、同様のことが自分達にもおこっていたかもしれない。2の8のみんなが、生徒会のボールの取りあつかいが雑になっていたから今回の事件がおきたのではないか。

(5班) 自分達はこんな観点から話し合いました。ボール1個かもしれないが、もしこのボールを新しく購入すると、3000円相当ならば、ベルマーク・アルミ缶3000点集めなければいけないということをもっと自分たちで自覚すべきである。

(2班) 1学期間2の8ががんばったとしても買えないのか。1学期の全校のアルミ缶を集めても1学年分のボールが買えないナ。

(6班) 先輩らの努力によって買入したボールを生徒会から貸してもらっていることを忘れて、いつも2~3人で悪用していた。

- ・話し合いをまとめよう。

みんなのボールということを認識すべきである。1個3000円でも14クラスで42000円、42000点ベルマーク・アルミ缶を収集する努力のことを考えて使おう。

(4) 生徒総会で否決されそうになった生徒会新聞の発行 反対 539票

① 評議会での反省・・・バズの利用

- ・前年度の様に一人一枚配布するとうけとられ、紙がもったいないという意見があった。
- ・評議員が、クラスにて説明不足があった。クラスでの話し合いの不活発さがあらわれたのではないか。
- ・より一層、みんなにうけいられる生徒会新聞づくりをすべきである。評議員も協力する。

② 生徒会執行部と委員会との連絡会

生徒会活動の中心となる執行部と委員会委員長の連絡会（昼食会）にバズを取り入れた。生徒会の活動計画・立案・運営上の問題点を話し合うとともに、その内容を生徒会新聞に紹介するとともに一般生徒に広報することにより、自分達の生徒会であるという意識づくりに努力している。

毎週土曜日のA裁の時間に委員会が開かれ、活動しているが、次の月曜日に各委員長と執行部が昼食を持ち寄り、委員会活動を生徒会として、どうバックアップするか話し合い、委員会活動をより活発にしようとしている。

(例) ○/○

ア・営繕委員会・・・修繕作業をおこなった。

⇒修繕作業が大変だったということよりも、廊下を走らないでくださいとか、こわさないでくださいということをPRすべきではないか。 (生徒会新聞 No16)

イ・保健委員会・・・つめ切りキャンペーンの実施について。

⇒掲示用のB紙の提供だけでなく、理科クラブに協力を呼びかける。生徒会新聞でPRにつとめる。 (生徒会新聞 No6)

⇒生徒会としてクラス備品としてつめ切りを1個か2個購入してはどうか。

“賛成”・・・いつも同じ者のつめが長いので、検査の時長かつたら即切らせるために必要である。

“反対”・・・本来、つめ切りは家でおこなうものであり、学校へ来て検査のために切るようにならないか。

“結論”・・・一度各クラスで話し合い、再度保健委員会で話し合っ て決めよう。もし必要ならば、生徒会は全

4・生徒会活動への取り組みと学級会

(1) 5センチ運動の反省 (1年6組学級会)

- ・ 今回の5センチ運動へどのように取りくんだか説明を聞く。
 - ☆合言葉“みんなで215センチを達成しよう”を決めた先回の学級会の報告を聞く。
 - ☆参加状況・5センチ持って来た人・・・15人
 - 5センチ以上持って来た人・・・24人
 - 忘れた人・・・4人
 - ☆第3回5センチ運動の収益 58,360円
- ・ 班で5センチ運動の反省をする。うまくいった班と、うまくいかなかった班の発表を聞く。
 - ☆班の発表
 - (A) 持って来た人が多かったが忘れた人がいて残念だった。
 - (B) 持って来るのをすっかり忘れてしまった。
 - (C) 班競争だったのでたくさん持って来た。
 - (D) 持って来た人は、忘れた人をカバーできてよかった。
 - (E) 持って来ても5センチちょうどだった。
 - (F) 持って来る人と持って来ない人の差がめだった。
- ・ うまくいった班と、うまくいかなかった班の反省を聞いてどんな事を感じたか。
- ・ 目標以上に取りくむことのできた班と、そうでなかった班と、どこからそのちがいが生まれたのか話しあう。
 - (G) 班競争のことしか考えていなかった。
 - (H) 新聞を持って来ようという意識の差があらわれた。・・・4班6班
 - (I) みんなに勝ちたいという意識の差。・・・2班
 - (J) 家にあった新聞の差。
 - (K) 生徒会に協力しようという気持ちの差。・・・7班
 - (L) 5センチ以上持って来た人は生徒会に協力しようという気持ちが強く、5センチ持って来た人たちは、ただ持って来ただけではないか。・・・5班
 - (M) 生徒会に協力的か協力的でないかの差。・・・8班
 - (N) 生徒会活動を活発にし、早く映画を見たいから持って来た。・・・1班
- ・ 司会者が学級会のまとめをする。
 - (司会者)・・・5センチ運動を通じて自分達が生徒会に協力しているうちに、自分達の生徒会ということがあらためてわかったと思います。だから、みんなが協力すると同時に、学校の備品を買ったり・行事を行ったり・学校で生活していくなかで役立てるために収集活動をしている。
 - (評議員)・・・今日の学級会の意見をもとに、これからも収集活動を行っていきますので、みなさんも協力して、中部中学校をよりよくしていこう。

生徒の意識調査

1. 生徒会に協力しようという気持ちの差・・・17名
2. 家にあった新聞の差・・・10名
3. 新聞を持ってこようという意志の差・・・9名
4. 5センチ以上持って来ると重たいから・・・2名
5. 兄弟の関係で持って来るのに差があった・・・1名
6. その他・・・4名

(2) 5センチ運動の取り組み方について (2年8組学級会)

議題「最終日に2人忘れれが、取りに帰ることにより、クラスの全員が5センチ運動に参加することができた。今後の取り組み方について話し合おう。」

・班で話し合う。

- (1班) 取りに帰って良かった。取りに帰らないと今度忘れる者が増えるといけなから。
- (2班) 今回は取りに帰っはが、次回の5センチ運動に忘れたら10センチ持って来させる。それでも忘れたら20センチにする。
- (3班) 10組のように2日間で集める。2日目に忘れた者が取りに帰れば、3日間で100%が達成できる。
- (4班) とにかく全員持って来たことは事実であり、生徒会から感謝状がもらえることはいいことだ。
- (5班) 4班の意見とは反対で、感謝状なんかいらなと言ったらウソになるけど、もっと真面目に取り組むべきだ。
- (6班) 新聞を忘れた者は、もっとベルマーク、アルミ缶を持って来るべきだ。
- (7班) 実際、2人土曜日の朝に忘れたことは事実であり、取りに帰ったことで、100%達成クラスとして、感謝状をもらうのはおかしのではないか。
- (8班) たった2人のためにクラスの団結がこわれようとしている。2人はもっと自覚すべきである。

・他班の意見を聞いて再度話し合おう。

- (4班) みんなが期日どりに新聞を持って来れたから、そこからクラスの雰囲気はよくなっていくと思うし、これからは感謝状はどうでもいいから全員が期日内に5センチ持ってこれるように努力しよう。
- (6班) このクラスにも兄弟が中部中に3人もいる者や、新聞を取っていない者もいるので、その分をみんなの協力でカバーできないか。

クラス分のつめ切りを購入する。

ウ・生活委員会・・・あいさつキャンペーンの実施について。

⇒キャンペーンのクラスごとの取り組みの手助けにしてもらうためにB紙・マジックを提供する。標語の募集をおこない、立て看板を脱靴室にかかげる。

⇒写真クラブに協力を求め、キャンペーン風景を写真にして、後日、脱靴室に掲示する。

5・まとめと今後の課題

この2年間、生徒会活動が生徒達の主体的な活動になるように、全職員で取り組んできた。一つは、生活指導面より、個々の存在感を育成するために、一つは、生徒達が主体的に活動できるようにと、学級会に“バズ”を取り入れて活動をすすめてきた。

「5センチ運動」を核として、生徒の主体的な活動は、それなりの成果をおさめてきた。もちろん形式に流れる部分（100%の生徒が主体的な目的意識をもっていないという事）はあるが、全体として、忘れた者の5センチ分をカバーしようとする雰囲気、土曜日の午後取りに帰ったことでほんとうに100%達成したことになるかという、より高度な話し合いができるようになった。そして、それらが、本校の生徒会活動がより積極性を増し、生徒自身にとって自分達の活動になってきたと考える。特に、5センチ運動をはじめとする収集活動の収益金の使い道についての話し合いは充実度を増してきている。

バズを利用した話し合い、学級会活動により、生徒全体のモラルを高めつつある。学級会にて、学級の諸問題を取りあげつつ、積極的な話し合いを通して解決方法を見い出したり、全員が一人ひとりで学級の係活動を分担し、責任と仕事の遂行の喜びを感じる中で、集団への連帯感や全体のモラルを高めることができつつある。生徒会の主体者として生徒会に参加する意識が一層高められ、真のよりよい学級づくり、学校づくりを前提とした活動に参加できるようになった。そのため、大規模校にもかかわらず、大きな非行問題も発生することなく、生徒の教師への信頼も大きいと考えられる。生徒にとっても、自分達の責任のある行動が、自分達の自主的な取り組みの幅をひろげ、より活動の場を保障されるという、よい循環が生まれつつある。

今後の課題として次の点があげられる。

- ①評議員の力量の問題（リーダーの養成）。
- ②参加生徒の生徒会活動に対する意識の問題。
- ③生徒会活動の時間的確保。
- ④学級会でのバズをより一層学習活動に広げていくこと。

これらの一つひとつ解決していくことにより、バズ学習の研究をより一層すすめていきたい。

相互学習, 自己評価の徹底, 確実が 自己実現を生みだす

(第6分科会) ・ ・ 単元見通し学習による授業改善 ・ ・

兵庫県姫路市立書写中学校
萩藤 優子

1. はじめに


本校は、姫路の市街地北西部にある西国第27番目の札所、旧曾左小学校の校舎を使っての出発、姫路市27番目に昨年4月開校し、本年2年目を迎える。学級数は1学年9学級(395人)、2学年9学級(365人)、3学年8学級(335人)、教職員45名である。

開校当時、各教師それぞれに学習効果を上げるためにはどうすればよいかを模索し、5月よりバズ学習(生活バズを中心に学習バズをも含む)を実施しはじめた。はじめは軌道に乗りにくい面(学習の方法や手順を修得させるため)が多くあったし、各教師の持つ指導観、生徒の実態の把握の相違などによる曲折があった。しかし、それぞれに生活バズ、(朝学活、終学活において生徒を主導的に動かすこと、および相互学習、自主学習、自己点検ができる方略)が必要であることを痛感していた。そこで、リーダーの教師を中心に、各学級、各教科それぞれできる範囲から実施していくことにした。

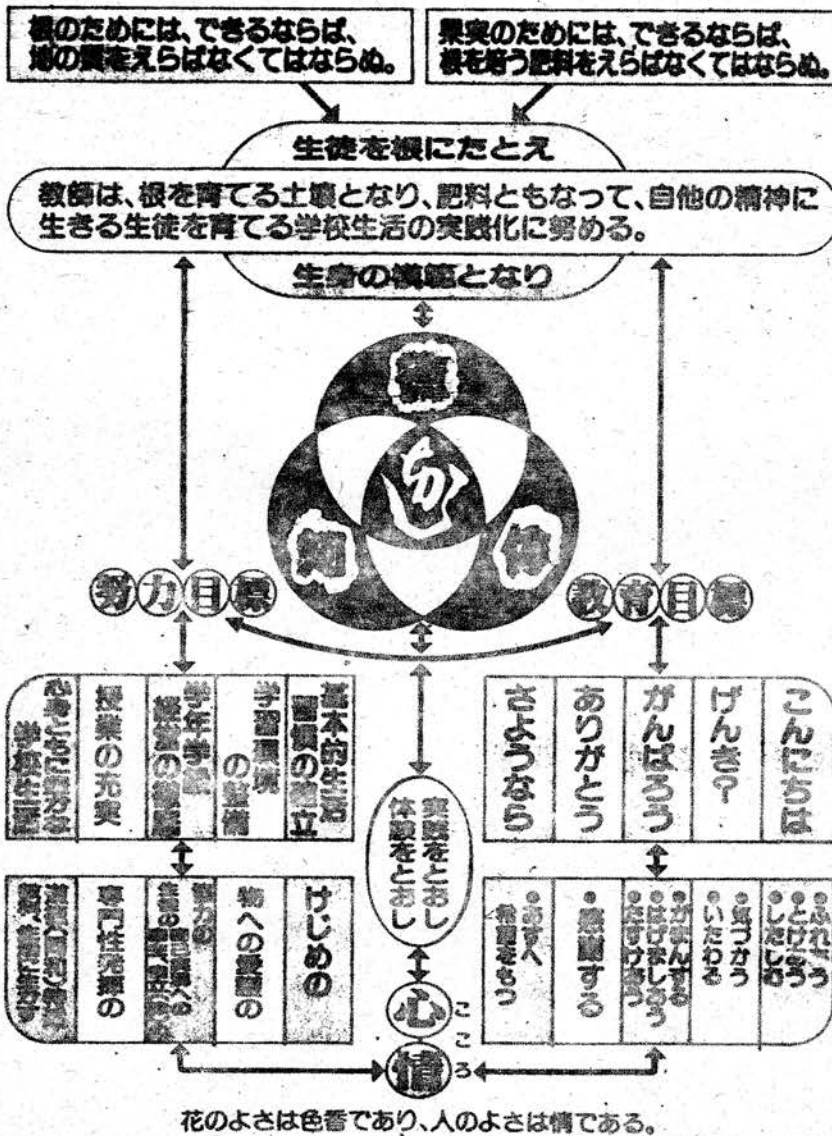
昭和58年10月7～8日に実施された第18回全国バズ学習研究会に本校から3名の教師が参加し、先進校の実際と内容を知り、11月5日には教頭先生はじめ、各学年2名計7名の教師が泉中学校にビデオカメラを持って出席し、11月30日、全職員による研修会を実施、個々の教師の実践報告をし、討議し実践活動を深めている。

2. 本校の教育目標

書写中学校教育の根幹

-  のある人づくりにかける
- ◎花づくりは立派な土づくりが基本であり
 - ◎土づくりは立派な花づくりである。
 - ◎土づくりは伝統ある学校づくりにつながり
 - ◎土づくりは人づくりである。

和辻哲郎博士著書(偶像再興)樹の根のこぼ



昭和58年度の研究計画

研究課題

- 基本的な生活習慣の確立のための過程を試し、各教科の基礎的・基本的事項の習得と自ら学校りとする学習意欲を育成するための方途を考える。
- ・・・生徒・教職員とともに新しい学校づくりのため「0から出発、創造の苦しみと喜び」をモットに日々実践していく・・・

研究内容

- (ア) 基本的な生活習慣、態度を育成し、その定着をはかる過程を考える。
- (イ) 指導の目標を明確にし、課題学習の構造化をはかり、学習過程を重視した指導を考える。
- (ウ) 心身ともにすこやかな学校生活(学級生活)をすすめるための学級づくりに重点をおく。
- (エ) 学校・学級経営と学習指導の有機的な決合の中で人間尊重の精神の徹底をはかる。

昭和59年度の研究計画

1. 自主的な学習態度と励まし支え合い学習集団を育成する。
2. 基礎・基本を重視して、学習の内容と指導方法との質的改善をめざす。

研究課題

- 生徒一人ひとりが意欲的に学習に取りくむことをめざし、生徒にとってわかる授業、楽しい授業となる学習指導法の研究。

研究内容

- (ア) 各教科の基礎・基本を重視し、学力の向上をはかるとともに生徒にとってわかる授業、楽しい授業となる学習指導法を考える。
- (イ) わかる授業、楽しい授業となるための教材、教具の整備、充実をはかる。 ・ ・ 「指導力を高める校内研修」

1. 教育目標の具現化を図る

- (1) 生徒と教師が一体となり、工夫し、汗水流し、協力し合っの集中脱靴場のす板づくり、清掃の不徹底さを見事克服した体験学習のすばらしさ、す板の上は素足でと、教育長や他の人にもスリッパを脱いでもらったほどの徹底ぶり、今までの砂はどこへやら、どの学校にも自慢できるすばらしく、美しい脱靴場となった。
- (2) 生徒会(生活委員・交通委員)中心の地域社会への呼びかけ、協力を得ながらの校門での朝のあいさつ運動。自転車の置き方の整然美づくり。
- (3) 「宿題一土づくり運動」NHKニュースワイド7月19日放映
よく肥えた土壌づくりは地域社会の向上であると信じ、一人パケツ一杯土づくり運動を展開。生徒と先生、生徒と家族、生徒と地域社会の人々との触れ合いによる体験学習。手づくりの土壌は自分の成長過程のたとえ。

2. 学級経営

望ましい学習集団の形成

- 自分の生活を見つめることができる生徒(個人と集団) ・ ・ 自分を自分で教育するなかで生きがいのもてる生活実践を行う。
 - ・ “ちから”の活用
 - ・ 個人(班)ノート
 - ・ 朝、終学活の生徒による運営
- 自分の存在感の持てる学級
 - ・ 一人一役
 - ・ 学級内表彰

3. 学習指導

わかる授業の創造・・・子ども一人ひとりを生き生きと！！
(学習に満足感・成就感を持つよう指導の改善に努める)

学力を伸ばす指導と人間関係を高める指導

※授業が成立するための基本的条件

1. 的確な学習内容の指示・・・課題との対決をとおして、子ども自ら問題状況(あるいは目的意識)を見つけ出す。
2. 授業は生徒自身のもの・・・授業は教師が学んできた学問の価値、興味を生徒の発達段階を考慮しつつぶつけていくものだから、教師の計画、運営でいかなければならない。しかし、生徒の一人ひとりが学習に参加できなければいけない。
3. 教師と子どもとの間の望ましい信頼関係・・・相互の信頼関係。生徒のもつ変容の可能性に対する信頼。

◎目的目標を追究する能力・態度の育成。

何をさせるか。——何をしたがつているか。
(拘束) (創造意欲)

◎じっくりと目的目標に取りくむ資質の育成。

いかなる方法・手順。——結果より過程重視

◎目的目標に取りくんでいる自分を客観視できる資質を育成。

競争——相互協力・相互作用

～よい個はよい集団によってのみつくれる。よい集団は
よい個人によってつくられる～

事例 1: 常に教室へ遅れて入ってきて

いたN君とI君の変革

事例 2: 学級集団の支えによるK男の

高まり

事例 3: 非行歴のあるM子を立ち直ら

せた学級集団帰属意識

3. 問題点と解決への方向づけ

開校以来、基本的生活習慣の確立をと呼びかけ、けじめづくり・学級づくり・授業づくりの“三づくり運動”の中で、特に学級づくりが授業づくりの基礎・基本であるということを実施し、昭和59年1月にそのあゆみをつぶさに見つめる中で、確かに生徒達もより落ち着いて学習に励むようになった。

しかし、生徒自身の学習態度や方法がどのように変わったかは、教師の主観に負うところが非常に多い面があり、果たして本当に効率よく、学力定着につながったのかを見るべく、別紙に示す意識調査(イメージ調査)を実施し、今後の相互学習(生活パス・学習パス)に生かそうと考えた。特に国語科における相互学習、自己点検に焦点を当て、実態を調査することにした。

調査期日： 昭和59年9月12～20日

調査学年： 第2学年4クラス(男子61名、女子74名、計135名)

調査内容： 別紙参照・・・国語科としての内容を含む

調査方法： パス学習を実施したクラス・・・2クラス
一斉学習を試みたクラス・・・2クラス

1. 調査方法および内容について

パス学習を実施している2クラスと、一斉学習を実施している2クラスを対象にし、それぞれ国語科においてブリテストを実施したクラスと、そうでないクラスにわけ、それぞれに内容を検討することにした。

使用教科書・・・「中等新国語」光村図書

単元課題・・・文学と人生、題材“夕焼け”吉野弘

対象クラス

- | |
|--|
| (1) A組(男子20、女子20、計40名)
・・・パス学習を実施、ブリテスト・ポストテスト実施。 |
| (2) B組(男子20、女子20、計40名)
・・・パス学習を実施、ブリテストなし・ポストテスト実施。 |
| (3) C組(男子20、女子20、計40名)
・・・一斉学習を試み、ブリテスト・ポストテスト実施。 |
| (4) D組(男子20、女子20、計40名)
・・・一斉学習を試み、ブリテストなし・ポストテスト実施。 |

内容については、生徒個人の意識を調査し、他の生徒に対しでどのように働きかけ、学級としてどのようにするのが望ましいか。学習方法において、どのような班を作ることが大事であり、生徒個人としてそれを実現するため

にはどうすればよいか。また、バズ学習と一斉学習の違いや、国語科における教材内容などについて調査し、学習意欲が出る学習方法の一形態として、バズ学習が有効に学習(授業)に作用することなどについても調べた。

2. 調査結果の検討 (分析・考察)

下記のような方法を取り、検討を加えた。

検 討 項 目		(1):A	(2):B	(3):C	(4):D
(1)-A (40名) バズ学習 プリテスト実施	Pre-test X 1056 SD185 Post-test X 1317 SD169		I	II	III
(2)-B (40名) バズ学習 プリテストなし	Post-test X 1403 SD234			IV	V
(3)-C (40名) 一斉学習 プリテスト実施	Pre-test X 1246 SD246 Post-test X 1378 SD237				VI
(4)-D (40名) 一斉学習 プリテストなし	Post-test X 1405 SD239		VII		

VIII : (1)、(2)、(3)、(4)の集計 (Xは平均)

4. おわりに

授業は、生徒一人ひとりの参加があってはじめて成立するものであり、わずか1~2週間の日数の中においても相異が見られたように、相互作用の中で自他ともに見つめられ、そのことが自分の目標もてる自学自習に、さらに意欲の高まりから自己実現につながると見る。

しかしながら、今少しその方向性が見い出せたにすぎない。いかに厳しく支え、深まりのある学習指導を進めていくかを今後の課題とする。

問 題

授業に関する学習指導活動では、その計画から実施、さらに評価に至る各フェイズ相互に切り離して考えることはできない。

授業改善をめざしての工夫は、それがたとえ一部のフェイズにかかわるものでも、他のフェイズの内容を変えずにすむ場合は少ない。計画、実施、評価の全過程にわたる再点検をその有機的關係づけの視点から行なう必要が出てくる。本研究では、保健体育科、柔道の授業で、旧来典型的と考えられる指導手続き（実験条件Ⅰ）、グループを導入した指導手続き（実験条件Ⅱ）、小集団の活用をねらった指導手続き（実験条件Ⅲ）、小集団内における評価活動を導入した指導手続き（実験条件Ⅳ）、について学習効果を指標として検討する。なお、学習効果は技能的領域と態度的領域の目標達成についてである。

さて、旧来の指導ストラテジーの改善のポイントは大きく分けて次の3点である。

(1) 目標の設定—教師の指導目標を予め明確にしておく。さらにそれを生徒の学習目標に直しく課題化、学習者がしっかりと把握できるように計画・準備する。

(2) 小集団の活用—学習は小集団中心の活動形態をとる。教師の企図した学習目標の枠内での学習内容に関する細かいチェックや習得の工夫は小集団内の相互作用に任せる。

(3) 評価活動の導入—形成的評価を学習途中や授業終了時などに、可能な場面で評価活動を積極的にとり入れる。評価の主体は生徒におき、評価の学習活動調整機能の側面を活用する。

なお、この3つのポイントの関係について触れるならば、目標の明確化は、教授＝学習の活動を的確に方向づけるための不可欠の条件である。とくに小集団を用いる場合、学習目標が明確であり、メンバー全員が正しく学習活動に方向づけられる必要がある。その一方で、十分な配慮のもとに運営される小集団活動は、明確化した目標で提示される技能領域と、技能の習得過程でこころがけるべき、態度領域の達成目標は、指導目標の同時的かつ効果的な達成のために適切な手段の一つと考えられる。

小集団を用いることによって、生徒に主体的な学習活動を許すならば、そこでの学習内容と速度を調整するための評価活動も彼らに任せなくては、指導のねらいに一貫性がなくなることになる。主体的な評価活動は学習態度や学習技能にかかわる望ましい態度目標の達成に役立つものである。具体的には生徒間の相互評価と自己評価がその手続きとして適切であろう。一方、相互評価、自己評価を効果的に行なうためには小集団形態での指導が必要となる。

主体的な評価活動が的確になされるためには、具体化された目標が提示されなくてはならない。学習指導目標と評価のポイントは対応していなくてはならない。評価結果は次の学習目標、指導目標設定に欠くことのできない情報となる。

方 法

対 象：高等学校、保健体育科柔道（1単位）連絡変化技の単元（6時間） 被験者：高校3年生男子生徒、4講座 144名。4講座をそれぞれⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、の4条件に配置（各条件36名）。

集団構成：各条件とも実験期間内固定の4人集団を構成、4人集団の構成は、2年次の立技の達成度評価を基準に、集団内異質、集団間等質。

指導過程：大外刈→払い腰（第1時限）、払い腰→支え釣り込み足（第2時限）、支え釣り込み足→背負い投げ（第3時限）、背負い投げ→小内刈（第4時限）、復習・定着（第5・6時限）

学習・指導目標と達成目標：

(1) 技能的領域—個々の投げ技について取と受の行動から連絡変化技を理解し、実践的なものとして定着する。

各連絡変化技について習得すべき行動目標

例、「大外刈→払い腰（右組の場合）」

- ①取—奥襟を持った右手で受を引きつける。
- ②取—左足を踏み込み、右足を大きく受後方へ刈るために振り上げる。
- ③受—右足を後方へさげ、右腕を取の肩へ当てて押し返す。
- ④取—振り上げた右足を受の右足に当てながら、左足の方向を右回りに180度回転させる。
- ⑤取—受の右袖下を持った左手で受を前へ崩しながら右足を払い上げる。

(2) 態度的領域—下記の8項目について習得する。

- ①柔道の学習に熱中する。
- ②気軽に注意・指導しあえる仲間となる。
- ③仲間と共に技を伸ばすことを喜びと実感する。
- ④相手の下手な所を指摘・指導する。
- ⑤相手に対して本心から「礼」を尽くせる。
- ⑥自分が理解出来ないことを自発的に質問し、援助を受ける。
- ⑦相手の不得意な所を指摘・指導する。
- ⑧技の習得に自分で工夫を重ねる。

設定した指導ストラテジー：表1に各条件における指導ストラテジーの差異を示す。

表1 条件別指導ストラテジー

		I	II	III	IV
導入	5分	はじまりのあいさつと準備運動（教師主体）			
	10分	本時目標（技能）の示範と解説	本時目標（技能と態度）の明確な提示ならびに示範と解説		
展開I	10分	教師主体で本時目標（技能）の確認 （教師が決めた相手）	（4人Gr内の相手）	4人Gr主体で本時目標（技能と態度）の確認	
		形成的評価（自己評価）			
展開II	20分	輪転形式の乱取練習（3分×5本） （同上） （4人Gr内の相手を交替して）			
整理	5分	教師主体で整理および整理運動	4人Gr主体で整理	Grで形成的評価（相互評価）	

なお学習・指導目標の態度的領域の8項目は、形成的評価活動として、1時間に8項目ともおこなうには時間がなかったため、実験の奇数時限には奇数項目を、偶数時限には偶数項目を提示し、評価した。

結果と考察

技能的領域の目標達成 技能面の習得状況を第6時限が終了した1週間後と2か月後に、技の理解度と、実践性という2側面から評価した。

理解度は生徒の、得意とする連絡変化技を2種実施させて、学習・指導目標の技能面、5ポイントについて正確に実行されているか否かを評定（5ポイント×2種）し、10点満点の得点で示した。

実践性は、2分間×2本の乱取練習をさせ、その「技有り」以上のポイントを積算して、得点とした。

技能面での学習効果を表2に示す。なお、条件間の平均値の差はt検定による。

表2 技能的領域の目標達成

条 件	I	II	III	IV	
把持I	理解度	4.11(0.94)	3.77(0.89)	5.18(1.02)	4.26(1.15)
	実践性	0.79(1.03)	1.13(1.34)	1.03(1.11)	2.31(3.37)
把持II	理解度	5.11(1.35)	4.58(0.91)	5.11(1.14)	5.17(0.83)
	実践性	0.61(0.96)	1.34(1.59)	1.16(1.35)	1.97(2.91)

*** p < .01 ** p < .05 * p < .1

理解度について、把持Iでは、条件IIIがとくに優れ、条件IIがとくに劣る。把持IIでは、条件IIがとくに劣る。また、把持IとIIの比較では、得点の上で条件I、II、IVは伸びているが、条件IIIは伸びていない。これらの結果から、単にグループを組んで授業を実施したところで、技の理解は少ないことが示唆される。

実践性について、把持Iでは、条件IVがとくに優れ、把持IIでは、条件Iがとくに劣る。また、把持IとIIの比較では、とくに大きな変化は認められない。これらの結果から、旧来の指導手続きよりも、小集団内に評価活動を導入する指導手続きが技の実践的習得に効果があることが示唆される。これは、Bandura.A(1971) 示唆や、五泉、伊藤、猪俣ら(1978)の実験結果などからも、裏付けされるように、目標提示直後の実習と目標提示後に、一時学習の目標を自分なりに理解した上で、実習にとりかかるといった「ゆとり」の有無の差でもあるように考えられる。

技能的領域において、条件IとIIよりも条件IIIとIVが優れる傾向がある。これらの条件差を検討すると、達成すべき学習課題とその方法・手段との関係が明確化し、構造化され体制化されたときに、その学習課題は解決され、学習は成立し、目標は達成されたということである。また、こうした学習の結果から得られる知識・技能は、記憶された断片的な知識ではなく、理解された知識と思考された技能であって、いわゆる定着度の高い技能である。これは、心理学における洞察(insight)であり、「見通し学習」といわれるものである。さらに、指導目標としての理解力や思考力が育つのもこうした学習過程を通じてであるということが考えられる。

態度的領域の目標達成 態度面の習得状況を第6時限が終了して2週間後に質問紙による満足度調査として実施した。質問項目は、学習・指導目標の態度面の8項目でそれぞれ、対課題、対学級内相互作用、对学习仲間、对小集団内相互作用、对小集団内仲間の満足度と、仲間からの教示有、仲間への教示有、目標への自主設定有、の行動反省についてである。上5項目は10点満点で、下3項目は5点満点で得点化した。

態度面での学習効果を表3に示す。

満足度について、対課題で、条件Iがとくに劣り、对学习仲間、条件IとIIが劣る一方で、条件IIIとIVが有意に優れる傾向である。また、对小集団内相互作用、对小集団内仲間においてはどの条件も高得点であり、有意な差は認められなかった。

表3 態度的領域の目標達成

条 件	I	II	III	IV	
満 足 度	対課題	5.06 (1.73)	6.08 (1.58)	5.79 (1.75)	6.43 (1.69)
	対学級相互 作用	6.78 (1.18)	7.11 (1.11)	7.18 (1.29)	7.29 (1.30)
	対学習仲間	5.75 (1.71)	6.84 (1.20)	7.39 (1.39)	7.37 (1.38)
	対小集団内 相互作用	7.31 (1.43)	7.45 (0.99)	7.48 (1.60)	7.61 (1.35)
	対小集団内 仲間	7.92 (1.55)	7.92 (1.09)	8.21 (1.36)	7.82 (1.54)
	仲間からの 行動反 省	3.33 (0.94)	3.45 (0.68)	3.76 (0.90)	4.00 (0.89)
目標の 自主設定	3.33 (1.03)	3.47 (0.91)	3.50 (0.91)	3.61 (0.71)	

*** p < .01 ** p < .05 * p < .1

これから、本時目標（技能と態度）をよく理解できるように設計された指導ストラテジーにおいて、仲間とともに伸びることを喜びとし、学習に熱中する満足を持つことが示唆される。また、教材の特性からか、どの条件においても、「礼」を尽くし、気軽に相手の欠点を指摘できることも示唆される。

行動反省について、これは、技能や態度の教育効果についての裏付け調査の意味をも持つと考えられる。ここでは、個人と仲間との相互間に教示のやりとりがあったことが、条件ⅢとⅣが条件ⅠとⅡに比較して有意に多かったことが示唆されている。

目標の自主設定では、各条件間に有意差は認められない。しかし、これは学習者の学習の場における意識であるため、もう少し、質問方法などを変えるならば、もっと明確な意識の違いが観測されるのではないかと思われる。

態度的領域について、全体的傾向として、条件Ⅰよりも条件Ⅱが、条件Ⅱよりも条件ⅢとⅣが優れる傾向が示唆される。これは旧来の指導手続きよりも小集団を導入した方が、学習者間で相互作用があり、それに満足し、学習に熱中できることが示唆される。

また、導入した小集団を有機的に活用しようと計画された指導ストラテジーは、仲間と共に学習結果がよくなることを喜びとし、相手の不得意な所を指摘・指導しようとすることが示唆される。

さらに、形成的評価導入の条件については、その効果は技能的領域のように統計学的な有意差を認めることができない。

評価活動の導入にあたっては、その結についたところであり、改善の余地が多いに残されていると思われる。その解決課題として、①自己評価、他者評価、相互評価等の活動時間の確保、②柔道学習活動場所のほかに評価活動場所の確保等である。

本研究は、昭和58年度文部省科学研究費補助金を得て行なった一連の研究の一部である。

分科会

基礎学力の充実をめざす学習集団づくり

岐阜県 泉中学校 加藤光明

・全校体制を取り組んでいること。

1. 1年時におけるバズ学習指導 (別紙) No1
2. バズ学習の種類と進め方 (別紙) No2-1)(2)
3. バズ学習生徒指導年間計画 (別紙) No3
4. グループ作りにおいて注意していること。

- ・同質の4人は避ける。
- ・一人だけ秀れ他は中以下というグループは避ける。
- ・学手のよくできる生徒は教室の周辺部に置く。
- ・視力の弱い生徒のいる場合はローテしているクラスもある。

グループの決め方

- ・子供にグループを決めさせる。
- ・中心的人物を選り出させる。(リーダー性のある生徒) 10人
- ・教師と相談し合いながらフォロアーとして適当な3人を各リーダーに組み入れる。

・英語科におけるバズ学習のあり方

1. 基礎学力について

英語科における基礎学力とは、言葉である英語に興味を持ち気持ち、感情を込め相手に英語が話せたという喜びを持たせるために、数多くの英文の暗記、単語の定着をはかることが、生徒達が生涯にわたって英語に触れようとする基になると考えた。そのためにはグループ学習は欠くことのできない学習形態となるのである。

我が校では、一二年基礎英語、三年統基礎英語を授業に取り入れ、生徒自ら進んで英語に触れようとする気持ちを育てようとしている。

2. 1時間の授業の流れ。(読み取りの授業の場合)

0	15	20	25	40	45	50
基礎, 続基礎英語	導入	新出単語	展	開	まとめ (グループ)	まとめ (全体発表)
(15分)	(5分)	(5分)	(15分)		(5分)	(5分)

基礎, 続基礎英語

英語係によるあいさつ, 司会による

(3分) テープに続いての発音練習(前日分)

(4分) グループ練習(グループで決めた单元)

(5分) グループ発表

(3分) 感想発表(全体での発表)

発表時の約束

- ・暗記することを原則とする
- ・男女のペアで発表する
- ・発表する单元はグループの話し合いで決定

初期段階でのグループでの動き

- ・グループでの動きは暗記が中心となる。
- ・自分の役割を覚えるのに精一杯である
- ・自分の分担だけ発表できればよいという感じの棒読み発表が多い。
- ・向がい合って発表しようとすると思記がつまらなくて言えなくなってしまう。

初期段階での全体発表

- ・しっかり暗記できてよかった。
- ・すらすらと言えてよかった。

感想を発表することにより、自分達の発表の注意事項がはっきりとして練習できる、自分達の指摘された点は、感想発表の視点となる。このように全体がグループを、グループが個をきたえる姿が見られるようになってきた。発表の方法も、ジェスチャー、絵、道具と自分達の得意な方法をとったり、発表の内容を相手の名前を使う等して、積極的に言葉として捉え始めようとする姿が見られ始めた。

導入

新出単語

- ・フラッシュカードによる全体練習
- ・単語チェックカードによる相互診断

Name	No	LESSON 1 §()	確認
① have	ハブ	持つ 持っている	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
②			<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
③			<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
④			<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
⑤			<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
計			<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>

上のようなチェック表により単語の定着をはかろうとしているが、方法はペアでの確認になる。活動はペアであるが、グループ活動で取り組ませることにより、より効果的なチェックを考えた。

チェックの方法としてはペアを順に変えてゆくのである。

B	A
C	D

グループの机列であるが AB AC AD
の順に変えてゆくのである

その利点としては、

- ・同じ者とのチェックではマンネリ化する
- ・同じ者とのチェックでは、負ける者は同じになってしまい負ける者はあきらめてしまう。
- ・今回はあまり差はなかった、B君には全然歯がたたなかつたがC君にはあと少しで追いつける、今度はガンバロウとやる気になる。

展開



まとめ

- ・読み取りでは意味のまとめをバズで行ない、文型であれば暗記中心にパターンアラクティスにより定着をはかることにより今日の授業のポイントを1人1人にはっきりさせる。

全体のまとめ

- ・グループでまとめたことを全体の中で確かめる。

下やとう指導 (with a circled arrow pointing to the right)

今後の問題点

仲間同士、きたえ合い、教え合う姿は素晴らしい点であるが、特に英語の得意でない生徒が、仲間を頼りすぎてしまうという心配がある、グループで理解したことを自分で確認したり、深めようとしたりする気持ちには結びついてゆかない。

バズの成立しにくい時

4人6人 10人 12人 15人 20人 ?

- ・基礎学力不足だったり、目立ちたい生徒がいて、いつもその生徒だけ出すぎて、他の生徒がおとなしい場合。
- ・教師の発問の仕方が適当でなかったり、生徒が授業の流れに乗っていない時にバズを仕組む
- ・一人一人に足場を持たせてバズに入らない時、一人の主張の強い意見に押し流されてしまう。
- ・バズ学習の時間について最大限4分ぐらいという話しが出たが、4分では理解、解決が無理な場合がある。
- ・バズポイントの出し方が生徒にとってはっきりしていない時。(教師自身が授業に行きづまりバズさせる時)

Zusatzmaterial

生徒に対する指導

◦バズ学習がなぜ必要なのか →最終的なねらいは円満な人間関係の中で学力向上の追求である → 三作り

1. 覚える → 忘れる

- ・ だから復習とが確かめが必要である
- ・ 覚えて5～6時間経った頃が忘れる率が高い。

2. 尋ねることによってわかる。教えることによってわかる。

- ・ わからなかったら聞く。・ わがったら説明する。
- ・ まちがっていたら指適してやる。今度は聞き役になれ。

◦進め方の指導

1. 個 → グループ → 全体

2. 時間配分 25分、15分、10分 → 15分は15分 - 10分の経過時間

3. リーダーとメンバーの役割

- ・ リーダーは学習リーダーが得意教科をもたせるか

◦バズポイントの記入について

1. いつ記入するか

11:20 遅飯 遅飯のあと

2. 書き方 → わかりやすく

バズのリーダーは? その役割は? 子とそう 不十分

◦学バズノートについて → 学習の共通の場である。

◦バズの種類と方法の徹底

種類 → 理解バズ 探究バズ 発見バズ 補強バズ

方法 → リーダー法 輪番法 対人法 自由会話法

グループづくり

- (4月) ・生徒理解を早くする努力
・出席名簿順, 男女各2名で計4名のグループ 千鳥
・バス態形になる練習 → 静かに早く

- (5月) グループ編成に入る → 円満な人間関係
いろいろな資料も参考になろうが, 担任の
常時観察を大切にしたい
- ・1人だけ学力が高くて, 他は低いとか, 4人共
同じ程度で同じような性格ということは避けたい
 - ・目の近い子 }
背の低い子 } 席のローテーションなども良いのでは
気分転換 }
 - ・学級の実態に応じてグループ再編成をする
2ヶ月~4ヶ月ぐらいが良いのではないが
 - ・並び方は, グループの話し合い, 班長の方針など

た バズの種類

で

学バズ

探求バズ
(深める)

<課題を深める>

※課題〇〇について考え
を深めよう
(輪番法)
(リーダー法)

理解バズ
(おぼえる おめる 練習)

補強バズ
(はっきりする)

<助け合って学習する>

※わからないことをはっきりさせよう。
(いろいろ)

探究バズの進め方

1. 今日の〇〇の時間出された課題について深めたいと思います。
2. どんな課題であったか〇〇さん説明して下さい。
3. まず自分の考えを発表できるようにまとめてください。
4. では〇〇君(〇〇さん)から、輪番法で自分の考えを発表してください。
5. 更につけ加えや賛成、反対の意見をそれぞれ出してください。
6. 大体深まったようですから、今それぞれの考えをノートにまとめて下さい。

理解バズの進め方

1. 今日の〇〇の時間でわかったことを言ってみましょう。
2. 〇〇君(〇〇さん)から輪番法で発表して下さい。
3. つけ加えること、わからないことはありませんか。
4. では今までの話し合いでわかったことをきちんとノートにまとめておきましょう。

発見バズの進め方

1. これから学習することで、問題にしたいことをはっきりさせましょう。
2. ○○さんの問題わかりますか。
3. みんなの問題にしてみます。

補強バズの進め方

1. 今日一日の学習で（今日の○○の学習で）わからないことがあった人はどしどし出してください。
2. 説明できる人はありますか。→ 指名
対人法
学習リーダー
学習部長
教科係
3. 今の説明でわかりましたか

それではもう一度説明してもらいます。

プリント No(3)

バス小委 生徒指導全体計画

59年度

	1年	2年	3年	全年
4月 基本月間	<p>(バス学習の意味・約束・方法などの確認指導) 。 学年で基本指導</p> <p>。 学級内でグループ別研バズ</p>			
5月 強化月間	<p>3年生兄弟学級見学 (生徒会執行部) 指導 (3年学級アソビ)</p>	<p>。 学級内でバズ学習を実践しながら問題点を追求する。(生徒会執行部の予告なし指導)</p> <p>。 代表学級——全校見バズ</p>		<p>学習生活健康</p> <p>部長書記リダー指導</p>
6月 学年間研バズ月間	<p>。 第1週 学年で都合の良い日を決め、半数学級が一年に研バズを行う。</p> <p>第2週 上記の残り半数学級が同様に研バズを行う。</p> <p>第4週 (生徒会執行部 学年担当教師の指導 研バズを行わない学級は全員各学級に分散して見学)</p>			<p>。 リーダー} あり方指導</p> <p>。 他学級の見学 視点を明確にして見学に参加し 自学級に取り入れる。</p>
7月 反省月間	<p>。 各学年共 1学期の反省と、2学期のめあてをまとめて、生徒会執行部提出</p> <p>。 反省めあてをたてる 時間を確保する。</p>			

ワークをやる
 ねらいをやる

8月 21月	全校間研バス	9月 3年研バス月間	<p>。各級ごとのバス学習の力量を示し、更に一層の強化前進をはかる。</p> <p>(視点)</p> <ul style="list-style-type: none"> バス黒板 バスポイント バスノート リーダー バスの流れなど <p>。学級執行部の改選後の</p> <p>学習 } 部長 書記 リーダー 生活 } 指導 健康 }</p>
12月	反省月間	10月 2年研バス月間	<p>。7月に同じ</p>
1月	仕上げ月間	11月 1年研バス月間	<p>。5月と同じ方法でバス学習を一層確かなものにしていく。 (生徒会執行部の予告なし指導)</p>
2月	年間反省月間	11月 1年研バス月間	<p>。生徒会執行部を中心にして、1年間のバス学習の反省と、そのまとめ</p> <p>。バス小委によるアンケート調査と、そのまとめ</p>
3月	まとめ	11月 1年研バス月間	<p>。来年度の構想とめあてをたてる。</p>
		9月 3年研バス月間	<p>。生徒会執行部 } 課題を無 。全教師 } 点化して意 識を深化さ はかる。</p> <p>。引き継ぎの確証</p>